
砂漠の風

サカナクア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂漠の風

【Nコード】

N4919M

【作者名】

サカナクア

【あらすじ】

魔族と物質族。二つの生き物が生きる世界。

知識豊かな用心棒リンは、ちょっとお人好しな青年グライと出会い、砂漠へと旅に出る。

グライは無事に故郷に帰れるのか？……リンの正体とは？

わたくし、サカナクアの初めての作品となります。

大体20話をめどにしております。……が、正直分かりません。

読みにくい所があれば、御指摘して頂ければ嬉しいです。

プロローグ

今から何百年も前のこと、地上界と地下界という二つの世界は一つであった。しかし、長い長い戦争の後に、二つに別れた。

魔で創られた生き物、魔族は、地下を領土とし、物質で創られた生き物、物質族は、地上を領土とした。

お互いの領土を犯さぬ限り、決して争うことはしないという、固い約束を交わして。

それから何百年という長い、長い間。両者は関わる事は無く、平和に暮らした。しかし、愚かな物質族は、その長い時間に戦争も約束も忘れ去った。

そして、自らの欲望の為に、地下へと侵略の手を伸ばしてきた。

魔族は、約束を破った物質族に激怒し、物質族を滅ぼすべく、全面戦争を仕掛けた。

そして地上と地下の大戦争が始まった。四十二年前のことである。

全ての生き物が、地上に集まった。地下は何も無い世界となり、地上は争いの炎に包まれた。

どちらかが滅ぶまで続くだろうと思われていた、この大戦争。両者共その半数が死に絶えた二十年前、形の上では終結した。

しかし、領土の問題は解決しておらず、また、誰が何故、どのようにして、戦争を終結させたのかも、謎に包まれたままである……。

出会・一

カナチスの街の入り口、ちょうど用心棒の仕事が終わったところで、客が礼を述べた。

「ありがとねえ」

その人は、人の良さそうな笑顔のまま、リュックからお金を出した。

「いえいえ。今回は、襲撃も少なかったですし、350Kでどうでしょう」

私の口から値段の話が出た途端、目の前の婦人は差し出そうとした袋からこっそり30Kを抜き取った。

まあ、バレバレなのだが……。

「あら、思ったより安いのねえ！でもよく働いてくれたから、20Kおまけするわ」

「恐れ入ります」

それでも、20Kのおまけは嬉しい。

「ありがとございました。それでは、また」

婦人に別れを告げ、街の中へと入っていく。ここ、カナチスは、

付近で一番の大きな街だ。前に来た時はすぐに客が見つかってしまい、あまりゆつくり出来なかったので、今回は、少しぶらぶらしてから客を探すことにしよう。

街の入り口から真っ直ぐ北に伸びる大通りには、数えられない程の店がずらりと並んでいる。

店の人と話したりしながら、歩き回る。

そこから少し裏の方に入ると、レストランや酒場などが軒を連ね、更に奥に入ると、民家やアパートが見えてくる。

これだけ大きな街だと、どれだけ見て回っても飽きない。今度は、大通りの先の工場でも見てみようかしら。そう思っただけで再び大通りに出たところで、街の中心部付近が騒がしい事に気が付いた。……それも尋常じゃなく。

何だろう……。ここは、物質族の街だ。普段ならヒト型の魔族はまず、入って来ようとは思わないだろう。それに、多少なりとも境界は張ってあるみたいだから、下等な生き物が入って来れないはずだ。だとすれば、だ、ヒト型物質族のいざこざという結論に至るのだ……。一抹の不安が胸を過る。

まあ、とにかく、見てみない事には分からない。そう思い、急いで騒ぎの方に駆け付けた。

「うわあ……」

騒ぎの原因はこれか。とにかく、気持ち悪い。そこで暴れ回って

いたのは、巨大なナメクジだった。高さは、軽く3 m有りそうだ。のたうち回り、付近の店を潰しまくっている。

しかし、そのナメクジの害よりももっと酷いのは、その周りの人達のパニック状態だ。

私は比較的早く着いたから良かったものの、50 m程後ろでは、逃げる者と来る者がぶつかり合い、怪我人も出ている。

さて、あんまりもたもたしてると大変な事になりそうだ……。これだけの大きさと言えども、所詮はナメクジ。私一人でも倒せるだろう。

「君、伏せて！」

言ったのは私じゃない。私と同年ぐらいの青年だ。何をするのかは分からなかったが、仕事柄、反射的に伏せた。

凄まじい雷鳴が轟き、ナメクジが消え去ったのは、その直後の事だった。

魔族は、死ぬと空気に還る。地上族が土に還るように。あのナメクジも、空気に還ったってことは、魔族だったのだろう。

「大丈夫？雷は、地面を伝わらないように調整したつもりだったけど……君が一番近くにいたから」

その声に顔を上げると、先程の青年が手を差し伸べていた。礼を言って立ち上がる。

「それより凄いわね、あれ。あなた名前は？」

「グライ。君は？」

あの魔法が使えるなんて……名前は覚えておこう。

「私はリン。用心棒やってるわ」

用心棒、という言葉聞いた途端、グライの顔が険しくなった。

「用心棒か……どのくらい腕は立つ？」

「ここから、サリダまでなら、一人で行ったことあるわ」

サリダというのは、ここから歩いて一週間程の村である。ここら辺は、弱い獣しか出ないので、あまり自慢にはならないが。

「仕事を頼みたいんだが」

周りでは店を直そうとする人や、先程の雷撃の噂をする人達でざわざわとしている。

「分かった。少し先に喫茶店があったから、そこで話しましょう。引き受けるかどうかは、仕事内容を聞いてから決めるわ」

出会・一（後書き）

第一話。どうでしたか？

こんな感じで書いていくつもりなのですが、次の話も読んで下さると、嬉しいです。

出会・二

カラカラという音と共に、扉が開く。前回の契約の時にも使った喫茶店だ。

とりあえず、奥の方に座る。

「仕事内容の前にちよつといいかしら。本当に私に頼むの？力も能力も知らないのにパーティー組むわけ？」

ずっと疑問に思ってた事だ。一人で旅が出来ると私は言ったのだ。それはつまり、回復魔法担当では無いという宣言みたいなものだ。

世の中の魔法の中でも、回復魔法は珍しい特徴を持っている。それは、兼用出来ないという性質である。

普通、物質族も魔族も生まれつき2つの属性の魔法を操る事が出来る（練習が必要だが）。しかし、回復の属性を持って生まれた者は、回復魔法しか出来ないのだ。

その上基本的には、回復魔法を操る者は、力が弱く、打たれ弱い事が多い為、一人で旅はしないものなのである。

だから、力量を尋ねられたとき、一人旅が出来ると言うと、回復魔法は使えないという宣言になるのだ。

そして、パーティーを組む時は、回復魔法担当は必ず入れるものなのだが…。

私の質問に暫く考え込んでいたグライが、口を開いた。

「いい。俺、一昨日まで兄さんと旅してたんだけど、話を聞く限りでは、君、兄さんと同じ位の力量みたいだし」

一昨日まで？仲違いかしら。私と同じ位の力量ならば、ここら辺の獣に殺されたりとかは無いだろっし。

でも、それはまた今度聞こう。早いところ契約をしちゃいたい。

「そう、ならいいわ。それで、何処まで行くの？」

「ヒラサナの村って知っているか？」

残念ながら、聞いたこともありません。遠いのかしら。

「分からないわ。グライさんの知ってる場所？」

別に私が知らなくとも、客が案内すれば良いだけの話だ。

「グライで良い。ヒラサナは俺の故郷だ」

「分かった。じゃあグライ、道順分かるわね。それから次、報酬の話だけど、着くまでにどれくらいかかる？」

そして、グライは暫く考え込む。目的地は聞いたこともない村だ。嫌な予感がする。

「そうだな。急げば1週間で着けるんじゃないかな。砂漠に有るん

「ただ、そこではバドリーが使えるし」

砂漠側か！道理で聞いたことが無いはずだ。そちら側には全く行ったことが無い。……それより、

「ばどリーって何？」

移動がし易くなるものなのか？

「ああ、乗り物みたいなものだ。とにかく、まあ、そんなもんだが、あまり報酬の値段は気にしなくても良い。仕事が終わってから、渡すものなんだろう？」

「ん？そうだけど。じゃあ契約成立ね。明日出発する？」

どうやら、家が金持ちみたいだ。今時、値切らない人の方が少ないというのに、値段も気にしないなんて。

「そうしよう。じゃあ明日朝、町の入り口でいいか？」

「いいわ。じゃ、また明日」

早々に別れを告げて、市場へ向かう。ふふふ、砂漠なんて初めて。楽しみだわ。

巨鳥・一

町を出て3日目。隣には用心棒、リンがいる。彼女の髪の毛は、光に透かしても真っ黒で、腰近くまで伸びていて、とても長い。それを頭のとっぺんでくくっている。……鬱陶しそうだ。

ここは、地図上では砂漠の入り口とされている場所だ。実際、砂漠がどこからどこまでかは、はっきりとは分からない為、あくまで地図上だ。……しかし、ここからは、圧倒的に街が少ないのは確かだ。

地図に於ける砂漠の範囲は、バドリーのテリトリーに等しい。

バドリーというのは、大きな鳥で、少ない羽毛と、鋭い眼光が特徴的だ。

俺の故郷ヒラサナは、ここから南東に真っ直ぐ行った所に有る村で、ちょうど砂漠の真ん中に当たる。

昼間休んで、夜バドリーで移動すれば、早くてあと3日といったところか。……思ったより早く着けそうだ。

口に指を当て、独特の指笛をする。これがバドリーとの会話方法だ。

「それが、バドリーってやつを呼ぶ方法か」

リンがぼそりと呟く。初めて砂漠に来たというのは、本当らしい。

……別に疑っていたわけではないが。

『乗せてくれ。二人。ヒラサナ。ヒラサナ』

バドリーに呼び掛けると、間もなく二匹のバドリーが降りてきた。

用意していた干肉を地に落とし、与える。すると、リンの震えた声が聞こえた。

「ま……まさか。それがバドリー？それに乗るの！？」

リンの顔がみるみるうちに青ざめていく。理由は明らかだが、一応尋ねてみる。

「高いところが苦手なのか？」

こくこくと頷くリン。……困ったな。

また、違う用心棒を頼めるのだろうか。しかし、高所恐怖症というだけで、契約を破棄しまつて良いものか悩む。

何より、ここまで来させておいて、帰らせるのは、可哀想な事だ。

しかし、今から歩くという方向にしまつたら、到底1週間で着かず、契約に反する。……どうしたものか。

ひたすら悩んでいると、リンが顔の前で手を合わせ、頼むように言った。

「歩いて行くのは駄目？私どうしても、砂漠の向こうまで行ってみ

たいの」

砂漠の真ん中に行くのであって、向こう側まで行く訳ではない。

しかし、そういえば、この間も砂漠が楽しみとか言っていた気がする。変わった人だ。

「別に構わないが」

砂漠を歩くのには、慣れているしな。

「ただ、一ヶ月近くかかるかも知れないぞ。良いのか？」

「全然OK」

食糧と水は、少し先にある街で、調達すれば良いか。

リンの真っ黒な服もそこで替えるように言わなくては。あれじゃあ死ぬ。

とりあえずは、魔法でなんとかするか。

言い忘れていたが、俺の属性は、電気と風。風の魔法で、空気を操る事が出来るため、暫くは、俺達の周りを涼しくしておこう。

『乗らない。乗らない』

バドリー達には申し訳ないが、帰ってもらおう。まあ、本人達はタダで肉が貰えて嬉しそうだし、いいか。

「ごめんなさいね」

「なにが？」

別に謝られるような事は何も無い。契約破棄なんて事にもならなかったし。ここを一人で旅するのは、結構辛いものだ。

「何がつて……」

突然リンが笑いだした。大丈夫なのか？

「いや、もういいわ。とりあえず、どっちにいくのかしら？」

何が良いのか分からないが、まあ、良いのだろう。

「南だ」

「了解」

もう、日は沈みかけていた。ファニラタの町には、明後日までに着くかな。

ファニラタというのは、先程述べた少し先の街の事である。

実際、戻った方が街は近いのだが、ファニラタに着くまでの水と食料は十分に有るので先に進むとしよう。

問題が有るとすれば、風の魔法の為の魔力が足りるかという事だが…そこは調整しつつ、頑張るしかない。

残念ながら、その計画は直ぐに駄目になるのだが……。

巨鳥・二（前書き）

二日連続の投稿です！

昨日、アクセス数がまた上昇するという嬉しいことがありまして。
はい。一喜一憂は良くないですね。

お詫びですが、出会・二のタイトルがおかしな事になっておりました。
すみませんでした。

さて、今回もまた、グライ君視点です！お楽しみに（？）

巨鳥・二

「グライ！上！」

バドリーを帰してすぐ、リンが血相変えて叫んだ。驚いて上を見ると、バドリーよりも大きな鳥が自分目掛けて突っ込んで来ているのが見えた。…間一髪で右に転がる。

どうやらさっきの干し肉を見ていたらしい。それか、匂いを嗅ぎ付けたか。しかし、どちらにせよもう、あげられる肉はない。戦うしかなさそうだ。

リンはもう槍を構えて、鳥へと突っ込んでいる。俺も慌てて剣を構える。……申し訳ないが、暫くは風の魔法は使えない。こちらに集中しなくては。

リンが突っ込んで来ると、鳥はすぐさま嘴を下に向け、牽制する。2mは有ろうかという巨鳥だ。さすがにリンはたじろぐ。そこですかさず俺が斬り込む。リンの方に集中していた為か、鳥は反応が遅れ、首の付け根に傷ができる。

しかし、ここは退き、鳥の怒りを誘う程度にしておく。戦いに於いて最も重要な事は、常に冷静さを忘れない事である。

この点に於いては、この鳥は賢かった。何しろ、結構ざっくり斬ったつもりなのに、いたって普通に振る舞っている。

リンの様子を伺うが、あまり顔色が良くない。暑さの為か。……

仕方無い。なるべく魔力は温存しておきたかったが、早く戦いを終わらせる方が先決だろう。

鳥がこちらの様子を見ている間に、密かに口を動かす。魔法には、それぞれ呪文の詠唱が必要である。それが高度な魔法であればある程呪文は長くなる。

俺の電気の魔法は、割と高度な為、それなりの呪文が必要だが、鳥が慎重すぎた事もあって、敵が反撃するまえに唱え終わった。

「伏せて！」

二人の声が重なる。偶然にも魔法を放つタイミングが一緒だったらしい。これは、運が良いな。

完全に同時に放たれた魔法は普通、何倍も威力が上がる。……普通は。

「どついつ事だ！？」

驚いて思わず叫ぶ。なんと、お互いの魔法が打ち消されたのだ。

自らの幸運を悟ったらしい鳥は、すかさず反撃を開始した。……狙いは、俺。俺がまだ肉を持っていると思っっているのか。……美味しそうなのか。

「離れて！」

そう言って、リンは槍を投げ出し、両手を地に着けた。……とその場所から電気が沸き上がり、バリバリと凄まじい音を立てながら、

地を這った。

かろうじて俺は避けるが、危なかった。

「グライ、あなたの魔法の属性は？」

新しく風の魔法をかけなおそうとしていると、リンが聞いてきた。詠唱を終えた後に答える。

「電気と……」

「違うわ」

俺の言葉を遮って続ける。

「あれは、神鳴りの属性よ」

そんなのは聞いたことが無い。

「かみなり？」

「そう、神鳴り。神鳴りの属性は、天の性質を持つものと、地の性質を持つものが有るの。そして、天と地はお互いを中和してしまう性質がある。だから、一緒に放ってはいけないの。知らなかったでしょ」

リンの口調は柔らかだったが、その目には少し怒りの色が見えた。しかし、ちよつと待て。

「も一回説明して」

はい、どうせ馬鹿です。

「んーま、ここら辺は知らなくてもいいわ。大事なのは、私の魔法とあなたの魔法が打ち消し合うという事なの」

それは困る。非常に困る。俺が理解したことを確認したらしく、リンが続けた。

「そういうことで、グライは神鳴り禁止でお願いします」

確かに、どちらかが使わなければ回避出来る問題だ。……が。

「それは困る。俺の得意技みたいなものだし。」

実際、俺の風の魔法では、あれ程の威力は出ない。しかし、リンは待ってましたと言わんばかりに、にやりと笑った。

「そうくると思った。でもね、私が魔法を積極的に使う方が効率良いのよ。グライと違って、呪文要らずなの、私の魔法って」

確かに戦闘中にも呪文を唱えていなかったが……。

「そんなこと、あり得るのか？何かのトリックが有るのか？」

物質族に許された、魔法を扱う方法は、呪文しかない。

「ま、話せば長くなるから、また今度ね。ついでに言うと、魔力もほぼ無限だから。」

呪文要らずで、魔力無限って……。

「魔族……なのか？」

しかし、見た目はまるっきり物質族である。……魔族は、自分の姿も自由自在なのか？

「また今度ね」

これ以上聞いても無駄らしい。

……それより、なんだかんだで俺の魔法禁止は、決定されたらしい。本当にいつの間にか。

まあ、色んな意味で、ただの用心棒じゃ無いことは明らかになったな。

暗殺者・一（前書き）

今までのお話を、ちょいちょい改善しました。

暗殺者・一

砂漠に入ってから丸一日がたった。私たちは、ファニラタの街に着いた。

隣のグライはかなり疲れたらしく、ぐったりしている。

さて、この4日ぐらいで、分かった事が一つと、分からない事が一つ出来た。

分かった事は、彼がかなりのお人好しだということ。……そう、かなりである。

まず、歩く事になってしまった事に関してだが、普通、用心棒を雇って希望にそぐわない時には、直ぐに取り替えたり、詐欺だと言って、金を取ったりするものなのだが、それがなかった。

それから、彼がぐったりしている理由でもあるのだが、ずっと私に、風の魔法をかけたり、かけなかったりしていた事だ。私の服が真っ黒で、（防御の為に）金属も多くあしらわれている為、熱しやすらしい。

元々、そんなに魔力は多くないと見えるのに、ぐったりするまで魔法をかけてくれるのは、少し申し訳ない気持ちになる。

分からない事は、砂漠が故郷の筈なのに、彼の髪の毛や、肌は、色が薄く、他の砂漠の民とは違うということだ。

しかし、そこは、お兄さんの問題と並んで、気にしないでおくべきだろう。

「取り敢えず、休みましょう。宿はどこかしら」

こここのところ、睡眠も充分に取れず、私も疲れていた。

睡眠は、魔力を回復させるが、十分でないと、回復も5割〜7割程しか出来ないのだ。

「ああ、こつちだ」

疲れた色を出すまいとした声で、しかし、短くグライは応えた。

暫く無言で歩き、宿を取り、私はベッドに倒れ込んだ。

「ああ……」

本当に疲れた。慣れない砂漠で、かなり体力を消耗してしまった。

しかし、今日ぐっすり眠れば、魔力も回復するだろう。

いつの間に寝たのだろうか、扉が開く音に目が覚めた。辺りはもう暗かった。真夜中といったところだろうか。

忍び込んで来たのは、ここらではどこにでも居そうな、普通の男だ。見たところ、賊か？

身体中に魔力を集める。あとはタイミング。

ナイフが首に降り下ろされる直前、魔法の土で固める。相手かわぬ手応えに狼狽える、一瞬の間にすかさず立ち上がる。

お気付きかと思うが、私のもうひとつの属性は、土だ。砂漠にきたためか、いつもより調子が良い気がする。

次々と来るナイフを土で受けながら、私は扉の方につくことが出来た。……もう逃げられまい。

ここまで来てやっと、攻撃開始だ。といっても、ほんの2秒程で終わったが。

簡単な事だ。相手の全身を土で固める。……顔は埋めないように注意しなくちゃ。

「おい」

相手を仰向けに倒して、声を掛ける。さあ、尋問タイムだ。

「殺しに来たわね」

襲ってきたのが、只の変態なら、ここまでではない。口に土を詰め込んでやれば逃げて行く。

しかし、殺しに来たのなら、話は別だ。誰が、何故、ということだ。

「リン、そいつは!？」

背後からグライの驚いた声がする。隣の部屋だし、騒ぎを聞き付けたのだろっ。扉も開けっ放しだったし。

「賊？暗殺？」

まだ良く分からないので、取り敢えず疑問形で応える。

「くそっ。まさか部屋を間違えるとは思わなかったぜ」

男の弦きが耳に入る。ミノムシ状態の人が何を言っても、最早ギヤグでしか無いのだが。

「あら、聞き捨てならないわ。間違いで人を殺そうとしたわけ？」

言葉に込める感情は、怒りだけ。軽く、ぐいぐい男を締め付ける。

「うっっ」

気絶されても困るので、魔法を解く。別に逃げられても構わないし。有益な情報を持つてる訳じゃ無いみたいだからね。……だって、部屋を間違えたのよ。こいつ。

途端に男が立ち上がる。……だからさあ。

「効かないって、それ」

ナイフを向けられたのは、私の隣のグライだったので、ナイフの軌道上にある部分を土で固める。

しかしグライは、ぎりぎりでしゃがみこんで、怒鳴る。

「お前！」

グライは男の首と、ナイフを持った手の手首を掴んで、壁に押し付けた。……様子がおかしい。

「グライ？」

私の言葉が聞こえていない？

「お前、兄さんは、兄さんは、どうした！」

あれ？話が見えないが。

「答える！」

良く分からないが、答えるも何も、今にも男は死にそうである。

このままでは、危ないので、止める。

「グライ、殺しては元も子も無いわ。逃げないようにするから、手を離して」

肩を軽く叩き、話し掛けても、気が付かないみたいだ。

焦る。このままじゃ、いけない。グライは我を失っているみたい。

取り敢えず、頭突き。後頭部に思い切り。なんとか届いた。

やっと私の存在に気が付いたようだ。

「死んじゃうから、手を離して。また縛るから」

グライは、そこでやっと手を離れた。すかさず男を土で締め上げる。

「それで？説明してくれるわよね？」

暗殺者・二

「グライ、もうすぐ北の端だ」

兄さんとの旅も、もうすぐ終わるだろうと思っていた頃だった。

「あとは、ファニラタの街に行けば終わりだよな」

それぞれ、バドリーに乗っていたので、大声で話す。

「そうだ。案外早かったな」

そういえば、半年もかかっていないかもしれない。

「これでやっと、兄さんも長だな」

「ああ、ありがとな」

言って兄さんは笑う。くしゃつとした、兄さんの笑顔は大好きだ。

「そろそろ、バドリーも疲れてきたみたいだ。休むか」

暫くしてから、兄さんが提案したので、地に降りる。

そこは、それなりに豊かなオアシスだった。そのうち村ができそう
うだ。

「兄さん」

日が上り始め、そろそろ寝ようかと思ったとき、おもむろに話かけた。

「ん？」

「俺さ、父さんが死んでから、ずっと思ってたんだけど……」

俺が、ここまで言ったところで、兄さんは俺の言葉を遮った。

「ああ。旅がしたいんだろう？お前バレバレ」

驚く俺をよそに、兄さんは声を上げて笑う。

「そんな笑うなよ。……別にすぐに、とは言わないんだ。少し落ち着いてからの話」

「いいよなあ。グライは自由だもんな。俺は、多分この旅が最後だろうな」

そう言われると、少しずきりとする。兄さんと、こうやって旅するのも最後になるのか。

「ま、土産話に期待しててくれ」

なるべく明るく話すが、兄さんは、小さな声で「ごめん」と呟いた。

それから、交互に見張りもしつつ、睡眠をとった。

俺の見張りの番の時だった。馬鹿な俺は、少し居眠りをしていた。
……本当に、馬鹿だった。

起きた時には、もう敵が襲いかかって来ていた。そいつらは、賊だった。

陰の方で寝ている兄さんには、まだ気付いていないらしく、全ての剣が俺の方を向いていた。

そこからは、まるでスローモーションのように見えた。

殺しにかかる賊。そして、俺と賊の間に滑り込んで来た兄さん。

せつかく、長になれたのに。なんて勿体無い。

「逃げる。お前が長だ!」

兄さんの叫び声で時間が動き出す。反論はしなかった。頭が真っ白のままに走り出した。

「それで、こいつがその時の賊ってわけ?」

リンは、そいつを睨み付けながら言った。

「ああ、こいつだ」

確認した後、リンはそいつに言った。

「グライを殺すつもりだったの?」

俺を……殺す？

「……」

無視だ。土を少しきつくしたようだ。

「……」

こいつは、かなり口が固いと見える。

「あつ」

気付いた時にはもう遅かった。

相手が水の魔法を使ったのだ。

土の魔法は溶かされ、途端にリンの部屋は霧だらけになる。

水の属性と土の属性の関係は、非常に術者の能力、集中力が反映されやすい関係だ。

先程のリンの集中力は、ゼロに等しかったのだから、あんなに簡単に破られてしまったが、土の術者の方が能力が高い場合は、水を土が吸い込む。

つまり、1か0の関係であるのだ。

風の魔法を使い、霧を追いつく。

「ごめんなさい」

申し訳なさそうにリンが謝る。

「ああ、別にいいよ」

リンは悪くない。ぼうつとしていた俺が悪い。

「追いかけないの？」

「ああ、あいつを締め上げたところで、何にもならないしな」

不思議と、平然としていられる。

「そうね」

リンは本当に申し訳なさそうだ。

暫くの沈黙の後に、口を開いたのは、リンだった。

「それより、どうするの？これ？」

宿中、眠りを阻害された旅人達の怒りの声で溢れていた。

もちろん、この後、手分けして謝りに行ったが。

暗殺者・二（後書き）

オチがお粗末でした

面倒事・一（前書き）

ラサメ編です。

割と一つの山場になるつもりです。

面倒事・一

ファニラタを出てから、二日が経った。特に何事も無く、ラサメの村に着いた。

……それは良いとして、何だかこの村、旅人をもてなし過ぎのような気がする。

俺達が着いたのが、夕方。それから、村の長の家まで、半分連行されるような形で、連れて行かれた。

それから、宴会。久し振りに、あんなに豪華な食事をした。村人は、踊ったり、歌ったりと、本当に楽しませてくれた。

「なんか、申し訳ないよな。長の家まで上がり込んで」

「やっぱり普通、こんなにしないわよねえ」

そして今、用意された寢室にいるが、やっぱり長の家の中だ。

普通、長の上に上られる人は、特別な客に限られるものなのだが……。

「うーん、嫌な予感するなあ」

リンがぼそりと呟いた。

「嫌な予感？」

「そう、嫌な予感」

検討もつかないが、何か考える所が有るのだろう。

翌日、心地の良い、ベッドの上で、目が覚めた。

まだ朝も早く、村中が静まりかえっている。しかし、起きてしまったんだから、少しぶらぶらしようかな。

こつそり扉を開けるが…。

「んん？グライ散歩？」

寝ぼけた声で、リンが尋ねる。起こしてしまって、申し訳ない。

「ああ。起こしてすまない」

「じゃあ、私も行こうかな」

そう言って、リンは、薄いカーディガンを羽織った。本当に申し訳ない。

この村は、10世帯程しかない、小さな小さな村であるが、湧水も有り、豊かだ。

これだけ豊かなんだ。もう少し人口が有りそうなものなんだけどな。

しかも、よく見れば、老人ばかりが多い。なんだか、この村は不

思議な事が多いな。

そんな事を思いながら、長の家を周りをぶらぶらしていると、大勢の人の声が聞こえた。リンと顔を合わせる。

「見に行くわよ」

「そんな、覗き見みたいな……」

言ってみたが、リンはもう、声のする方に歩き出していた。

最近つくづく思うが、俺はリンに引っ張られている気がする。

声のものは、以外に近く、長の家裏側だった。

つまり、長の家は、玄関が二つあって、俺達が入った側の裏側が、集会場になっていたらしい。

しかし、すごい人の数だ。恐らく、村中がここに集まっているのだろう。

「この村は偉いな」

朝のこんな早い時間に集会をやるなんて……うちの村じゃ考えられないな。

リンがため息と共に、呟く。

「…ばか」

俺か？俺に言ったのか？まあ、良いけどさ。

そして、耳をそばだてる。罪悪感はあるが、リンが促すので仕方無いということにしておこう。

『…やっぱり、食事の時でしょうか』

『だから、昨日の夜にと、言っただろうに』

『そうだ、いつでも言えただろう！』

そうだ、そうだと、ざわつく。

『でも、見ず知らずの人に……そんな……』

『じゃあ、私達の子供はどうなるのよ！』

子供？

その単語で、体が勝手に動く。リンの制止が見えたような気がするが、気付いた時には、集会場の扉を開いていた。

「その話、詳しく聞かせてくれませんか？」

背後から、うわあ、という声が聞こえた気がするが気にしない。

「これはこれは、旅人様達。起こしてしまって申し訳ありません」

声には、困惑の色が含まれていたが、その顔は、待ってましたと言わんばかりの笑顔だ。

「それで、何かお困り事でしょうか？これだけおもてなし頂いたの
で、良ければ、出来る範囲でお力になりますが」

精一杯の敬語を使う。長の息子として、敬語を使う機会が少な
った訳じゃ無いが、やっぱり苦手だ。

「そうですか！」

集会場がざわつく。

「面倒くさい事になってきたなあ」

リンがぼそりと呟いた。

面倒事・二

さてと、面倒くさい事になった。前々からお人好しだとは思っていたが、ここまでとは……。

「あのさ、リン……」

グライが、昨日も泊まった部屋で話し掛けてきた。謝罪かな？

「もう一回説明してくれないか」

はい、本日三度目。朝、長から聞いたのを合わせて、この子は四回説明を受ける事になる。

ため息がこぼれる。グライの顔が『なにもため息吐かなくても……』と語っているが、ため息ぐらい吐かせてくれ。

「まず、目的は、何者かに拐われた子ども達を救うこと。ここまで
は、大丈夫？」

こうなったら、なにがなんでも理解させてやる。

「ああ」

「場所は、この地図に有るわ」

近くの机の上から、一枚の紙切れを取る。

「武器は、一杯良いのが用意されているから、要る分だけ使って良いらしいわ」

グライがフムフムと頷く。

「成功したら、報酬としてその武器をあげるって。これだけ」

「……それだけなのか？」

かなり簡単にまとめたため、そう思うだろうが、それだけだ。

最初っからこうすれば良かった。長の余計な苦勞話や、娘の自慢話諸々で、頭が混乱してたのだろう。

「なるほどな」

その言葉も三回目だが、今回は、本当に理解したみたいだ。

「ちょっとその地図見せてくれ」

グライは渡された地図をじっと見詰めた。

「やつぱりだ。目的地はかなり近い。老人が目立ったのはそのためか」

成る程ね。グライもただのおバカじゃ無いのね。

「なかなか鋭いわね。だから、村の人もあんなに必死なのよ」

つまり、子どもは拐われ、若い人達も助けに行って帰って来てい

ないのだ。

私だって、この人達の力になりたいと思った。……面倒くさいけど。

「もしもさ、相手が口で言って納得しなかったら……手加減出来る自信有るか？」

この村の若者が帰らないということは、相手はそれだけ強い可能性は十分に有る。

「止めといった方が良いわね」

グライは、ここで黙り込み、何かを思案するかのように、目を瞑り、そのままベッドに倒れ込んだ。

彼なりに考える所が有るのだろう。

その考えを邪魔してしまつて悪いが、出発は明日だ。色々準備もしなければ。

「グライ。先に準備を終わらせてから考えてちょうだい」

反応無し。……まさか。

「グライ、寝てる？」

仰向けの顔を覗き込む。……寝てる。呆れた。

不思議な事に、肌は白いくせにそばかすも無い。

サンディブロンドというのだろうか、その名の通り、砂の色をした髪の毛だ。まあ、砂漠の砂とは少し違が。

髪の毛を一房手に取り、顔を近づける。……魔力含有量は、ほぼ0といったところだろうか。

道理で魔力の上限が低い筈だ。物質族でも、髪の毛に多く魔力が含まれていれば、魔族までとは言わないが、それなりに魔力の上限が高かったりするものなのに。

しかし、強さでいったら、普通程度かな。もちろん、神鳴りは元から強い魔法だから、それは考えないとしてだ。

さてと、起こすべきか……。うーん、寝かせておこう。せいぜい、その少ない魔力を全快させておいて欲しいものだ。

「旅人さん。ちょっとよろしいですか？」

扉を叩く音と共に、声が聞こえた。

扉を開け、人差し指を口元にやる。

「なにかしら？」

グライが寝てる事に気付いてか、彼は小声で答える。

「すみません。でも、寝てらっしゃるのか……。実は、村の倉庫の武器を今広げまして、選んで頂きたいと思いましたんですけど……」

「大丈夫、私が選ぶわ」

実は、あの細身の剣は、グライには合わないと思っていたのだ。良い機会だ、私が選ぶ。

老人について行くと、集会場にこじんまりと、武器が並べてあった。

結構綺麗に手入れはなされているみたいで、良かった。

まず、私の槍より強そうなのは……うーん、大きすぎて持ちにくそうなのは、駄目ね。

結局細身の槍を、2本試しに使ってみることにした。一番重要なのは、電導性。

槍を地面に突き刺すように両手で持ち、地面から、神鳴りを呼び出す。

嬉しい事に、2本目の真っ白な槍は、今の物より断然良く電気を通した。

ありがたくこれを頂くとしよう。

さて、グライの分は……電導性は考えないから幾分楽だ。

明日の反応が楽しみだわ。

大剣・一（前書き）

明日から、また、二日に一回更新したいです。

大剣・一

目が覚めた。

いつ寝たのだろう。確か、4度目の説明を受けて……そうだ。

リンはどこだろう。……まだ寝ているか。聞きたい事が有るのだが、仕方がない、起きるまで待つか。

しかし、リンが起きるまで待つというのは、なかなか難しい事だ。というのも、彼女は、何をやっても起きる。物音や気配に、非常に敏感だ。

昨日の事で懲りた。細心の注意を払って出ていこうとしたのに、起きたのには、びっくりした。

ということで、寝ている間に着替えを済ますという事も出来なさそうだ。もしかしたら、起き上がるだけで煩いのかもしれない。

……なんだか、身動きが取れなくなってきた。少しも動いてはいけない気がしてきた。

もう一度寝よう。

……寝ようと思うと余計眠れなくなってきた。元々二度寝は苦手だ。一度起きたらもう眠れなくなる。

「グライ？どうかした？魔力が乱れているわ」

あああ。結局起こしてしまった。しかし、リンの言うことの意味が分からない。

「魔力が乱れる？」

「ええ。心が乱れると魔力が乱れて、一点に集まらないの。ほら、焦ってたりすると、魔法失敗しやすいって言うじゃない」

寝起きでも、博識は健在だ。あくび混じりだが。

「でも、それがリンに分かるのか？」

「魔族は、魔力を感じる事が出来るの」

…ということは。

「リンは…」

「違うわ」

リンは、俺の言葉を遮り、やはり眠そうな声で続ける。

「魔族とも言えるけど、物質族とも言える存在ってとこかな……」

よく分からない。というか、全く分からないが、深く聞いたら余計分からなくなりそうなので止めておく。

そつえば。

「質問が有るんだけど、魔族って死んだら空気に還るじゃないか」

魔族でもあるらしい、リンに聞くのは、少し気が引けるが。

「魔族が死ぬラインってどこなんだ？」

例えば、腕を切り落としても空気にはならないが、首を切り落とすと即座に空気になる。その違いが知りたいのだ。

「そうね。内臓かしら。内臓を切り落したり、大きく破損すると、身体中の魔の粒子がばらばらになるらしいわ」

それに、脳が含まれるということか。

「珍しく、理解早いわね。内臓が、魔の粒子を止めているんだって」
なるほどな。

「ありがとう」

「それより、どうしてこんな事を聞くの？」

「ちょっと気になってな」

この事を知っているか、知らないかが、ちょっと重要な事なんだが、俺の考えた作戦は、まだ思い付きの段階なので、言わないでおく。

「それより、昨日、グライが寝た後、好きな武器を選べって言われたから、グライの分も選んだの。見てみてよ」

嬉しいな。まあ、自分で選びたい気持ちもあったけど。

リンの指差す方向に目を遣ると、立て掛けてある槍と、大剣が……て、

「大剣!？」

がばつと起き上がる。

こんなの持てるのか? 長さは1・5m程も有る。幅も有る。

「これ…人間用のサイズじゃ無いだろ」

「いいから、持ってみてよ」

両手で掴み、持ち上げると、尻餅ついてしまった。かなり軽い。

「魔法がかかっているようね。物を軽くする魔法っていうのは風の属性だから、グライには余計効果が有るんじゃないかと思ってね」

「なるほどな」

魔法がかかっているにしては、重さが中途半端だが、きっと軽すぎるくらいなんだろう。

鞘から抜き、刃に手を遣る。大剣は普通、斬る目的では作られていないが、切れ味はどうだろう。

しかし、驚いた事に、触れる前に指先がすつと切れる。慌て手を

引く。

「これも、魔法か？」

「そうでしょうね。思った通り、威力が強くなっているわね」

にこにこしながら言う。……もっと早く言ってくれ。お陰で、指がじんじん痛い。

使いこなせるだろうか。両手持ちの剣なんて初めてだ。でも、これは使いこなしてみたい。どうやら、この剣には、心を引かれる何かが有るみたいだ。

「ちょっと外で振ってくる」

「いつてらっしゃい」

まだ朝も早い。リンは二度寝するんだろう。

ちょっと、羨ましい。

村から少し離れたところで、剣を振るってみる。片手もまあ、いけない事は無い。

そういえば、風の魔法がかかっているんだっけ。

リンの話によると、物を軽くする魔法と、風を操る魔法がかかっているんだろう。

ならば、重ねがけしたらどうだろう。雑草を犠牲にした結果、風

は、刃に沿って刃先の方へ流れていることが分かった。

それが高速だから、指や雑草が切れるのだ。風を刃に変化させる魔法と一緒に原理ならばの話だが。

刃先を地面に向け、呪文を詠唱する。イメージは、柄から刃先に向けて、風の刃を継続的に這わせる感じだ。

シュツと音がした。……弾かれた!?

地面を見ると、一瞬細い穴が空き、消えた。

予想外の結果に驚いたが、これもこれで面白い。

色々試したい気持ちもあったが、夕方に向けて、魔力を温存することにした。

……そう、今日出発するのだ。

大剣・二（前書き）

今回短い？

大剣・二

グライが帰ってきた時、私は荷物をまとめていた。

「おかえり」

疲れすぎて帰って来るものかと思ったら、良い感じにアップが出来たようだ。

「どうだった？」

「ああ、結構慣れるまで時間がかかりそうだ」

しかしその顔は、この剣に満足している様子。

グライは、パワーを生かせる剣が良いって思ってたのよ。

自分のベッドに座り、話を聞く。

グライも、木の椅子に腰掛ける。

「そういえばさ、切れ味とか増さないかな、と思って、この剣に風の魔法乗せてみたら、弾いたんだけど……なぜか分からないか？」

そんな事したんだ。発想は面白いが、何故弾いたんだろう。

「ちょっとそれ、抜いてみて」

グライが背中から、さらりと剣を抜く。……おいおい、もうちょっと、重そうに抜け。

「それ、重く無いの？」

「魔法がかつてんだろ？」

それでも、なんキロ有ると思ってんだ。

まあいい。それより、剣だ。ぐっと顔を近づける。……切られるまで近づくと、なんて事は無いから、グライ。ひやひやして見ないでちょうだい。

「うーん、これは……精霊の魔法……かしら。かなり珍しい物ね」

グライが不思議そうな顔をして、口を開こうとする。また、この人に説明をしないといけないようだ。

「分かった、分かった。説明するから。……精霊とは、世界の属性を司る者達のことをいうの。火ならファイアス。水ならウォリア。風はウィンディーヌ。土はアーシオ。電気はスピーキー。木はウッドント。光と闇はライトニウス。っていう風にね」

ここまでは、童話等でも出てくるため、グライも知っているだろう。

「作った目的は、不明ではあるんだけど、彼らが直接魔法を込めた武器が、それぞれ存在するの」

ああ、分かっているのかな？その顔は。

「フィアヌスは剣。ウォリアは盾。ウィンディーヌはそれね。アーシオは棍。スピーキーはブーメラン。ウッドントも盾ね。ライトニウスは槍」

「ブーメランって、武器なのか？」

うーん、そこ突っ込むか……。

「うん、まあね。そのうち説明するわ」

息を吐き、話を戻す。

「そして、その武器は、世界に一つしか無いの。だから、珍しいのよ」

うん、分かってますよ。その顔は、もう一度説明して、の顔ですよね。

二回目で、理解したグライは、突然立ち上がった。

「そんな物、貰えないって。俺、返してくる」

とつさに、ぱっと腕を掴む。返すなんて勿体無い。

「あのねえ、この村に有っても、宝の持ち腐れっていうの。手入れする人も扱う人もいないし。ましてやその価値も知らない人達なのよ。万が一、手入れが行き届かず、使えなくなったら、世界の財産が、一つ失われる事になるのよ」

もちろん、手入れなんて必要無い代物なのだが、私だって嘘くらい言う。

まだ納得しないのか。

「武器は、大切に保管するものでも、博物館に飾る物でもないわ。あなたなら使いこなせる」

だって、グライみたいな馬鹿力見たことないもん。

「なるほど。そうだな、武器は使って初めて、価値が生まれるのかもしれない」

うん。上手く言いくるめられたみたいだ。

こんこんと扉の音がする。

「朝食の用意が出来ました」

さて、夕方の為に一杯食べておかないと！

だから、ほら！申し訳なさそうな顔しない！……まったく。くれるって言っているんだから、素直に貰えばいいのに。

大剣・二（後書き）

二人の性格違いますよ
って事が伝われば満足です。

洞窟・一

陽もだんだん傾きかける頃、俺達は、地図の場所に来了。……何も無い。

「これ、本当に合ってるのかしら」

リンの呟きにも、同感である。

「魔法の気配は無いから、地下かしらね」

魔法で見えなくしてるという、可能性もなしということか。

リンが2、3歩進んだ。……と、突然姿が消えた。

「リン！リン！」

何があっただ。リンの消えた場所まで行くと、ふっと、地面が消えた。

なるほど、穴か。咄嗟に風を操る呪文を唱える。なるべく広範囲で効くように。リンまで届けばいいが。

かなり深い穴みたいだ。詠唱が終わり、ゆっくり降りるようにしてから、随分と経つ。

リンにも追い付いた。が、恐らく気を失っている。突然だったものな。

それよりも、魔力がもてばいいが。

しかし、直後に固い石畳の上に降り立つ。しょうがないから、リンはおぶる。

コツコツという音だけが、暗闇に響く。

「んん……」

リンが気がついたようだ。

「大丈夫か？」

「ええつと……」

少し記憶がぶっ飛んだか？

「ほら、穴に落ちた……」

「ああ、思い出した」

リンは、俺の話を遮って続けた。

「パニックになっちゃって……て、ごめん。ずっと背負ってたのね。もう、大丈夫だから下ろして」

ゆっくり下ろす。……が、どん、と音がした。ゆっくり下ろしたつもりだったのに。

後ろを見ると、リンは尻餅をついていた。申し訳ない。

「すまない。ゆっくり下ろしたつもりだったんだけど」

「あ、違う違う。なんか足捻ったみたいで……ごめん。私ここで待つから、片付けてきて」

残り魔力は、半分弱といったところか。

「足首だな？」

頷くリンを見てから目を瞑る。あまり得意な魔法ではないのだが。

詠唱を終えて、目を開けると、驚いたリンの顔が見えた。そういえば、回復魔法が出来るという事を、言っていなかった気がする。

「俺、あんまり回復得意じゃ無くてさ」

「いや、貴方は人として規格外ですね」

呆れた顔で、リンが言う。良く分からないが、誉められてはいないようだ。

「いやいや、ごめん。ありがとうね」

立ち上がりながら、リンが言った。どうやら、表情に出ていたらしい。

「さてと、これはどうするか」

実は、ここは道の分岐点だったのだ。

「じゃあ、私は左行くから、グライは右で良い？」

気持ち良いくらいの即決だ。異議はない。

「じゃあ、またな」

魔力は残り少ないが、もともと、物理攻撃の方が得意な俺だ。なんとかなるだろう。

少し歩くと、突き当たりに広い部屋があり、人、それも魔族が立っていた。

「やつと、骨のある奴が来たようだな」

とりあえず、話し合いが大切だ。

「子ども達を返してくれ。俺は、戦いたくない」

本当に、自分勝手な考えだが、人は殺したくない。獣より人が大切だとか、そういう事じゃなくて、理由は自分でも良く分からないが、獣は殺せても、人は殺したくない。

「そいつあ冗談が過ぎるな。強い奴と戦いたいから、子どもを餌にしたのに、戦わずに返せる訳が無いだろ？」

にこにこ笑いながら、彼は続ける。

「勝ったら、牢屋の鍵をあげるってんでどうだ」

「生きているんだろうな」

「そんなこたあ、どうだっていいだろ！」

ピキピキという音が聞こえる。氷柱か！咄嗟に右に転がる。背中の剣が多少邪魔だったが。

立ち上がり剣を抜くと、また、氷柱が頭上で作られる。今度は転がらず、相手に向かって走る。

とりあえずは、間合いを詰めなければ、反撃は出来ない。

しかし、回り込むように氷柱が降ってきて、思っように近付けない。

「くそっ」

思わず悪態をつく。魔力はとって置きたかったが、このままでは埒が空かない。

走りながら、そつと呪文を唱える。効果は、一秒で良い。その代わり、一気に畳み掛けないと。

地を蹴り、宙に舞う。落ちてきた氷柱は、俺の周りの風に蹴散らされる。そしてまた、素早く口を動かす。……間に合え！

予想通り、俺の剣が突き刺さった相手は、強くも無ければ、戦い慣れもしていなかった。

剣は、間を置かず、すぐさま引き抜く。

「鍵を渡せ」

驚いて呆然としている相手に言う。

「わ、わ、な、ぜ……」

訳の分からない事を言い出す始末だ。

「……は……死ん……だ」

「ああ、一度な。いいから鍵」

「お……お前……何者だ」

「名乗るつもりは無い。鍵を渡せ」

いい加減腹が立ってきた。相手はそれを感じてか、やっと俺の言葉に答えた。

「そ、そんなもん、ねーよ！」

まさか、もう子どもは……！

「てめえ！」

怒りに任せて腕を振り上げた時、甲高い悲鳴が聞こえた。

頭で考えるより先に身体が動く。

すぐさま男を離し、走る。さっきの悲鳴は、リンのものだ。

嫌な考えばかりが、胸をよぎる。

ああ！考えるな。走れ、俺。もう、仲間が死ぬのは見ないと、決めただろ。

暫く走ると、先程の部屋と似たような造りの部屋に着いた。

「リン！」

頭を押さえ込んだまま、倒れている彼女に、駆け寄る。

息は穏やかだし、手首が腫れている以外は、何も問題は無いようだ。

では、先程の悲鳴は……？

すぐ近くには、焼けた死体が一つ。それから、壁や床の無数の傷。

リンが勝ったのだろう。それだけは分かる。不思議だ。聞き間違えだったのだろうか。

「うわっ」

危ない危ない。考え込む内に、倒れるところだった。目眩がする。

そうか、魔力が身体に残っていないからか。

でも、ここで自分も倒れては、新たな敵に殺されてしまうかも、
しれない。

頬を叩いて、気合いを入れる。

「怖い……」

突然、リンの口から、漏れる言葉。はっとして見ると、その顔は、
苦痛そうに、歪んでいく。

「アイツが……」

誰だ。誰かが怖いのか？

そして、最後に出た言葉は……。

「私は、誰なの？」

洞窟・一（後書き）

私情により、一週間程お休みします……サカナクアを忘れないでね。

洞窟・二（前書き）

戻ってきました！

洞窟・二

真っ暗な空間に、靴の当たる固い音が響く。……真っ暗とは言っても、電球はついていたが。

しかし、先程のグライには、本当に驚いた。属性を3つも持っている時点で、もはや人ではないのに、更に3つ目が回復魔法とくる。

まあ、グライも私も、人ではないのだが。

やがて、突き当たりに着いた。もっと迷路みたいなものかと思っただけ、意外と簡単な構造だな。

「お前……強いか」

低い声の方を見ると、熊のような大男が見えた。かなり、強そうだ。

「なかなかね。それより……ここに子どもは、いないかしら。それに、貴方はなぜここにいるの？」

子どもを拐って、村をどうにかしようと、考えそうな人には見えない。

「いない。ここは、自分と、リードしか居ない。ここに居れば、強い奴を連れてくると言われた」

その可能性も、考えてなかった訳ではないが……。

「その代わりに？」

「その代わり、食糧を調達するよう、言われた」

村にも、何らかのメリットを与える代わりに、旅人を連れてくるように言ったのだろう。

もう、ここには用は無いんだが……。

「やるんでしょ。殺し合い」

「その為にここにいる」

地下で、私にケンカを売ろうとは、良い度胸だ。

地の神鳴りは、地面が無いと魔法が放てないが、地下では四方八方からの攻撃が可能だ。

久しぶりの命懸けの戦いに、身体中が疼く。しかも、相手は相当強いと見える。

静かに背中 of 槍を構える。と同時に、相手は走って来る。

まあ、接近戦タイプだとは、思ったわ。まずは、上からの軽い神鳴り。さらりと避けられたので、下から、右から……よし、捉えた。

すかさず彼を、色んな方向からの神鳴りで仕留める。……がその前に、相手が構えていた大剣が飛んでくる。

避けるが、集中力が切れて、魔法を発動出来ない。

なかなかやるな。ゾクゾクしてきた。

そうこうしている内に、相手は自分の目の前まで来た。瞬時に目の前に砂の壁を作る。

そうして、後ろに回り込もうとするが……いない。

どこだ、と考えた時にはもう遅かった。砂の壁を壊して、先程投げた剣を両手で振ってくる。

咄嗟に槍で受け流そうとするが、うまく出来ず、右手首に痛みが走る。

ひねったな。これは。

それからは、受け流す私の動作が不自然なのに気づいているのか、相手はどんどん剣を打ち込んで来た。しかも、神鳴りを避けながら。

私はというと、戦っているうちに、どんどん神経が研ぎ澄まされていき、同時に、イヤな感じがじわじわ染みてきている。アイツが来るかもしれない。

しかし、もう自分の力は、制御出来なくなっていた。段々神鳴りは、そのスピードと、本数が増していく。そして、そのうち、神鳴りが相手を掠める。……よし。

あっ……。自分の予想を遥かに超えた神鳴りが、自分の周り10

m程に落ちてくる。

相手は……跡形も無いだろう。残念だ、自分の力で勝ちたかった。そんな事より、だめだ。来る。力をもっと制御するべきだった。いつの間にかアイツを、呼んでいた。

頭が、割れる。痛い痛い痛い。

悲鳴？悲鳴が、私の悲鳴が、聞こえた。

……気がついたら、歩いていた。

何もない。ただ、何もない場所を、歩く。

前方には、ただ泣きじゃくる女の子。この子は良く知っている。

「ごめんね。」

視線を合わせる為に、軽くしゃがんでから、話し掛ける。

「お姉ちゃん、怖い。」

この子は、私をずっと怖がっている。初めてアイツになった日の姿のままで。

「泣かないで。私も、あなたも、まだ、ここにいる。それは、アイツが私達を支配するのは、まだだって事でしょう。」

本当は、そんな事は、誰も分からない。ただの気休めだ。

「アイツって誰？」

少女は、うつむいていた顔を上げて、尋ねた。

「分からないわ。」

わずかな情報は有るが、誰か、と聞かれると、答えられない。

「じゃあ……私は誰なの？」

顔が硬直したのが分かる。その無邪気な質問は、いつも私を苦しめる。

暫くしてから、少女は悲しい顔をしてうつむいた。真っ黒な髪が、顔を隠す。

「良かったね、お姉ちゃん。帰れるって」

「じゃあね」

これで、心の中の私ともお別れだ。正直、この少女は苦手だ。……自分なのに。

目を開けると、心配そうな顔のグライが見えた。

つまり、私は目を瞑っていたわけだ……アイツが体に乗っとる前に、倒れたんだろう。良かった。

「大丈夫か？」

「ありがとう」

グライは安心したように息をつく。

「どうしたんだ？」

「私ね、閉じ込めている人がいるの。いつ出てくるのか分からなくてね」

恐らく、グライは少しも理解をしていない。だが、それで良い。

「グライ！？」

恐ろしい事に気がついた。がばっと、起き上がると、頭痛が襲って来る。慌ててグライが支える。

「起き上がるな。」

あなたが言える台詞じゃ無い。

「魔力の残りは？」

明らかに、グライの顔色が悪い。

「えっと……」

「ごまかすな。」

「無いんでしょ。本当に死ぬのよ」

嘘じゃ無い。実際、意識があるのが不思議なくらいだ。

しょうがない。伸ばしていたのに。

小さなナイフを取り出し、髪の毛の毛先10cm程を切りながらグライに言う。

「息を吐いて」

素直に息を吐き始めるグライ。いい子いい子。

「息を吸って」

途端に、切った髪の毛が突き出す。

グライが少しむせはじめた時には、だいぶ手の上の髪の毛の色が落ちていた。

「何だ……」

「いいから、息を吸って。」

そりゃ、いきなり髪の毛を切って、匂いを嗅げみたいな事を言われたら、驚くだろう。

というか、私、グライから見たら、変態みたいだ。

「魔力、かなり回復したみたいね」

グライの魔力の上限を考えると、あんなにたくさん切らなくてよかったかもしれない。

「ありがとう。……だけど、どういう事だ？」

「魔族は、切り離れた体の一部が、空気に還る性質が有るの。」

分かってないな。

「つまり、髪の毛を切ったら、切った髪の毛は、空気に還る。指でも、足でも一緒。」

分からなくても、話を進めるぞ。

「で、私の髪の毛は、色素が魔でできてるの。」

だから、私の手には、白髪が残っている。

「もう一度……」

「却下。村に戻ってからね」

正直、身体がだるい。強い魔法を使いすぎた。

先に立ち上がったグライの手を取り、立ち上がる。

あ、やばい。思った時には、もう目の前が真っ白になっていた。

意識が無くなる。

帰還（前書き）

お久しぶりです

帰還

ぼうつと窓の外を見詰める。一人の男が手を振っている。

「兄貴い」

彼は、昨日の夜に戦った、魔族の男だ。

髪は青く短く、魔族独特の、長い耳を持っている。

そして、なぜか俺の事を兄貴と呼ぶ。

そして、よく分からないが、彼は村の人に慕われている。子どもの事件も、でっち上げだったらしい。

実際今、子ども達が彼に、遊んで欲しい、とねだっている。

色々と曖昧だが、俺が分かるまで説明してくれなかったのだから、しょうがない。

もう、昼間だ。リンを抱えて帰って来てから、12時間以上はたっただろう。

心配だ。もしかしたら、ずっと目を覚まさないんじゃないかと考えてしまう。

「心配性なのね」

呆れたような声が聞こえた。

「あ……起きてたのか？」

それに、俺は口に出してたのか？

「いえ、今起きた。私、どのくらい寝てたの？」

寝起きだからか、ぼつっとしながらリンが尋ねる。

「今、ちょうど昼間だ」

窓の外を顎で差してから答えると、リンは、顔をしかめた。

「グライ、ずっと起きてたでしょ。魔力回復しないわよ」

「一応、寝たんだが」

「心配性ね」

寝たが、気になって熟睡出来なかったただけだ。

「もう、大丈夫なのか？」

「ええ、ただの疲れよ。ただの……」

言ってから、後ろを向き、布団の中に潜り込む。

これ程嘘が下手な人は、初めて見た。

「兄貴い」

あいつだ。窓から身体を乗り出し、話す。

「なんだ？」

「村長が、来いって言ってますぜ」

正直、行きたくない。実はさっき、自分が、ヒラサナの長の息子だという事を言ってしまったのだった。

まあ、仕方ないから来たけど。

「グライ様。1カ月前に、ヒラサナの長殿がお亡くなりになられた事は、ご存知でしょうか」

がたん、と椅子が倒れる音がする。とっさに立ち上がってしまったらしい。

「本当…なのか」

敬語を使う余裕も無い。

「それで、現長から、砂漠中にこんな手紙が……」

現長だと？誰が。次は兄さんだったはずだ。

差し出された手紙を読む。

『我らが、砂漠の民よ。この度ヒラサナの長となった、ビラニだ。』

このような文面となってしまうて、申し訳ないが、お願いしたい事が一つ有る。最近、前長の息子だと偽る輩が砂漠をうるついているらしい。もし、そいつを見つけたらすぐさま処刑し、ヒラサナに報告をお願いする。そいつが語っていた名も、教えて頂けるとありがたい。どうか砂漠の民よ、協力をお願いする』

ビラニ。いとこのビラニが、俺を殺そうとしている……？

「私たちには、とても処刑など出来ません。どうか、一刻も早く村を出て下さりませんか」

ずいぶんストレートに言ったな。まあ、分かりやすくて良いが。

「分かりました。知らせて頂き、ありがとうございます」

この人に罪は無いからな。さっさと出ていこう。

リンは、おぶれば良いだろう。

「おいリ……」

窓から見ると、リンのベッドの脇には、あの男がいた。

見ると、リンは泣きながら何かを言っている。……なんだなんだ？

窓は閉められていて、何を話しているか分からないが、リンはなにやら苦しそうだ。

リンと、目が合った。俺に手招きしながら、男に何かを言っている。

「大丈夫か？」

開けてもらった窓から話す。

「兄貴、あつしも旅に同行しますぜ！」

「そうなのか！」

リンが、後ろで×印を作っている。……俺に断れってか。

「いや、しかし、人数は少ないほうが……」

「あつし、水の属性が有るんですぜ。絶対に兄貴達を水で困らせたりしませんぜ」

やたらに、ぜ、が多い。

「水、か……」

一瞬了承しかけた俺に、リンがジェスチャーで抗議する。

「やっぱり断る。その水を、この村に使ってくれ」

「そう、ですか」

悲しげに去っていく男。なんか申し訳ない。

「面倒くさいから、窓から入ったら？」

少し悩んで、玄関から入る。一応、長の家だしな。

「何の話だったの？」

リンが尋ねる。

「それが……」

荷物を纏めながら、事情を話す。

「ひどい話。グライはどうするの？」

故郷に帰るのか、ということか。

「帰る。あそこには、兄の婚約者がいたんだ。せめて……謝りたい」

兄さんが俺を庇って死んだ事を。

「見つからない自信は、有るの？」

見つければ処刑される。もちろん、承知だ。

「メリサに……婚約者に言えさえすればいいんだ」

忍び込むだけなら、自信は有る。

「死ぬ気？」

「帰れなくとも、いい」

死んだとしても……兄さんのところに行くだけだ。

「さあ！出発するぞ！」

今はただ、先に進むだけだ。

神（前書き）

短いすね

神

ラサメには、結構長くいたけど、まあ、あれもあれで楽しかったかな。……こいつさえいなければ。

「おい、いるんだろ？」

そう言っつて、グライがあいつを岩陰から、出したのは、ついさっきの事だ。

別に、昨日の事が無ければ、こんなに毛嫌いしない。

昨日、グライが呼ばれて出て行っつてから、すぐに扉を叩く音が聞こえたので、入るように言った。

「神は、お目覚めですか？」

気持ちの悪い敬語だ。まったくイライラする。

「それは、殺人衝動に駆られているか、ていう事かしら？」

いきなりアイツの話をしだした時点で、大嫌いだ。

魔族は、賢く、正直者で、欲がない生き物だ。それに、隠し事は一切しない。

だから、物質族が忘れた 神 という存在も、そいつが今、どんな状況かも、全ての人が知っている。

「なぜ、穢らわしい物質族などと、旅をなさるのですか。貴方が出来ないのでしたら、わたくしめが、始末しましょう」

グライを慕っているのかと思っていたら、殺すタイミングを計ってたのね。

「やめて」

「しかし、神は、いずれ……」

途中で話を遮る。

「やめて！」

涙が出てきた。私だって分かっている。……でも、嫌だ。

「いつ……いつお目覚めになるのですか……」

私が、完全に神とは異なる事を悟ったらしい。男は、ため息混じりに言う。もう嫌。

そんな私の心の声も知らずに、男は続ける。

「わたくしめは、お目覚めになるまで、旅を共にする役目を、担いとうございます」

「嫌！」

窓をふと見ると、グライが見えた。

……しかし、あの後グライが断つたはずだ。

「あなた、ラサメに帰って」

切実に男に言う。

「それは、あつしにはひどい話つてもんですぜ」

グライがいるため、敬語ではない。

『メサラに、帰って』

無意識だった。

この言語を聞き、男はぶるりと震えた。

言葉が、無意識にすり変わった。……いいや。これで脅そう。

「次は魔力を込めるわよ」

「しかし……」

警告はした。

『帰れ。二度と追ってくるな』

男の目からは、光が消え、そして、走って消えて行った。

「リン……何をしたんだ」

グライの方を見ることが出来ない。命令の呪文を見て、私を恐れなかった人は、今までいなかった。

命令の呪文。アイツの魔法だ。この世で、この魔法が出来るのは、あと一人だけだろう。

「リン……何をしたんだ！」

男の異常すぎる行動に、先程の私が使った異様な言語。……グライが怪しんでも仕方がない。

「呪文で、人を操った」

正直にそう言うと、グライは吐き捨てるように言った。

「最低だな」

彼の感情は、恐れではなく、怒りだった。

気分（前書き）

タイトル無理やりですが、きまぐれと読んでください

気紛

なんか……なんというか、俺は馬鹿だな。よく分かりもしないのに、人に対してあんなことを言うものじゃない。

「あの、さ」

ものすごく、分かりやすく落ち込んでいるリンに、話しかけた。

「えーと、なんかさ、さっきは勢いでさ……すまなかった！」

驚いて目を見開くリン。俺は早口で続けた。

「それでさ、その命令の呪文ってなんなんだ？」

途端に呆れた顔になるリン。

「グライあんた……まあ、いいわ。命令の呪文は……そうね。ある、特定の人にだけ許された呪文なの」

慎重そうに、言葉を紡ぐリン。

「私のは、魔族に対してだけ効果があるけど、物質族に効くのもあるわ。ここまでは分かる？」

微妙……にもやややる。なにかが分からないのだろうか？だが、理解はしているつもりだ。

「大丈夫だ」

リンはこれまた、いつになく、ゆっくりと慎重に話を続けた。

「それからね、特別な言語が必要で、その言葉に魔力を込める事で、効果を発揮する。……みたいな感じかな」

「なるほど」

やはり、もやもやが取れないが、言っている事は分かる。

すると、リンは驚いたように言った。

「珍しく理解早いな！」

なんか、複雑なんだが……。

「それよりさ、なんでグライとお兄さんは旅をしていたの？……あつ、ごめんなさい」

突然の振りに、少し顔が強張った。別に話したくない訳ではないのだが。

「長になるための儀式みたいなものだな。ヒラサナは、占いの力で砂漠の中でもかなり権力を持っているんだ。それで、新しい長は、長になる前に、砂漠中に挨拶まわりに行くんだ」

顔くらい知られておけば、いざというとき役に立つからな。

「グライのいとは、それしてないんじゃないの？」

まあ、もつともな質問だろうな。

「別に、しなくてもいいらしい」

「なんか、案外厳しくないのね」

基本的に、絶対守らなければいけないきまりというのは少ない。

「砂漠は、結構そういうのゆるいんじゃないかな」

上空には、巨鳥が飛んでいた。砂漠は、自由に気まぐれな生き物が多い。

こいつも、普通に頭の上を飛んでいく事もあれば、突然襲いかかって来たりもする。

「また、あの鳥だ」

リンは、あの巨鳥を見かけると、すぐに攻撃体勢に入るが、いつでも襲って来るわけではないことが、まだ分からないらしい。

今も、俺たちの上を通りすぎて行った。

「そんなに構えなくても……」

「こつちに気がつかなかったのかしら」

つい、苦笑いをしてしまう。

きつと、真面目すぎるんだろっな。

旧友・一

野宿生活も、5日続けば、誰だって嫌になる。

今までは、5日以上連続したことはなかった。

「グライ、5日たったよ。なんで、街の間隔こんなに広いのかな」

最近、リンは目に見えてイライラしてる。

「ああ、その件で謝らなければならない事が……」

「許す。……どうせ、急ぐから街をすっばかしたとか、そういう事でしょう。さっきのは、嫌みよ嫌み」

気づいていたのか。申し訳ない。

「すまない」

「だから、許すつて。なんでそこで謝るかなあ。私が嫌みを言ったんだから、ここ、怒るところ」

俺はどうすれば良いんだ！

「そういえば、ここら辺に新しく街ができたらしい。そこを探すか？」

話を変えよう。

「それ、もう見えているわよ」

リンが指差した方向を見ると、本当に街があった。

「本当は、もっと前に気づいていたんだけどね」

それは、気づかない方がおかしい程に、近くにあった。

「気づいてたなら……あつ。すまない」

つまり、俺が急いでいるのを知って、無視していたのか。

「でも、あそこまで行ったら、また、距離が遠くなるわよ。せつかく直線距離で行ってたのに」

しかし、イライラするリンと旅するよりは。……でも急ぎたい。

……いやいや、彼女の体力の事が最優先か。

「いや、寄って行こう。直線距離で来た分、少しゆっくりしよう」

そうだ。ここで泊まっても、大した違いでは無い。

「ありがとう」

俺も、この言葉が口癖になればいいなと思う。……すまない、じやなくて。

そこは、言い方は良くないが、汚い街だ。

「じゃ、グライ、宿取ってくる」

「いや、俺も行く」

女の子がこういう街で一人で歩くものじゃない。

まあ、リンはむしろ、俺より強いくらいだけど。

宿の前には、一羽のバドリーと、隣に店を構える、見覚えのある少女がいた。

「メ……リサ」

「グライ！」

パツと立ち上がり、抱きついて来る。

「メリサ。良かった」

「グライ。大きくなったね」

メリサとは、一年以上会っていなかった。

「何があつたんだ？」

「うん。色んな事があつた。…話がたくさんあるんだ。後で私の部屋に来て。2階の一番奥だから」

「分かった。…手伝おうか？」

彼女は、占いの店をたたんでいた。

「いいよ、一人で出来る。……それよりさあ！あの娘、可愛いね。
……ふふふ。お姉さんには、いつ紹介してくれるのかな？」

気がついたら、リンはいなかった。先に宿に行ったのだろう。

「メリサ。……あの人は用心棒だ。ヒラサナに着くまでの……」

自分の声が下がるのが分かる。それは、つまり、兄さんがもういないことを、言うのが、嫌で。

兄さんがいたら、用心棒なんていらなからな。

「ふふふ。じゃ、その話も後程ね」

メリサが去ってゆく。その話とは、リンの話か、それとも……兄さんの話だろうか。

くくり付けられたバドリーを撫でる。

撫でる手に、水滴が落ちる。

「俺は臆病者だ。なあ、ロロ」

ロロは、答えるようにクアーと鳴く。

馬鹿だ。怖くて、泣いているのか？俺は。みつともない。

兄さんが死んだことを、何と伝えれば良いのだろう。

謝るといつても、どうすれば良いんだろう。

「グライ？これ、部屋の鍵だけど……」

いつの間にか、リンがいたらしい。

顔も上げずに、無言で受け取る。……感じ悪いな。

「ほら、頑張りなさいよ」

下げていた頭に手がぼん、と乗る。

「大丈夫だから。グライのせいじゃないのよ」

ぐいっと、手が引かれる。

「ほら、お茶入れるから、ゆっくり飲んでから、行きましょう」

自然と笑みが零れてくる。なんだか母さんみたいだ。

でも、その暖かさが、少し頭を冷やしてくれたみたいだ。……な
んだかおかしな話だが。

大丈夫だ。

旧友・一（後書き）

メリサさんは、グライの姉ではありません。
誤解を招いていましたら、すみません？

旧友・二

私はメリサ。グライの兄、ルサフの婚約者だった。

扉が叩かれる。……グライだ。

「どうぞ」

神妙な面持ちで入って来るグライ。

向かい側のベッドに座る。

もつと軽く話したいところだけど、無理ね。

「あの、兄さんの事だけど……」

「あ、うん。……いや、そんな！」

なんと、グライは床に膝をつき、頭を伏せた！

「すみません。全部、俺のせいです。すみません」

ぼたり、ぼたりと、床に涙が落ちる。

「待った待った。グライ、そんなに頭を下げないで。グライのせいじゃないって。ほら、顔上げて、ベッドに座って」

グライは渋々それに従う。

だいぶ大人びたと思ってたけど、こう見ると、まだまだ顔付きも、子どもっぽいところもある。

「あのね。グライのせいじゃないのは、本当だよ。あれは、あなたの叔父さんが仕組んだ事なんだ」

グライがゆっくりと顔を上げる。その顔は、驚きに満ちている。

「ビラ二様が長なのは、知ってる？」

「ああ……」

悲しそつに頷く。

「でも、実際仕切っているのは、その父のニサルク様。分かった？」

グライは軽く頷いた。この子に説明するには、ちょっと難しい内容だから、気を付けないと。……別に馬鹿にしてる訳じゃないよ。

「でも、本来なら、ビラ二様は、長にはなれなかった。そうだよね？」

一応、長を継ぐ可能性があつた、グライに確認する。

「ああ。でも、血族が死んだら必然的に……まさか！」

「その通り。ルサフはそんなもののために殺された……」

小さな小さな村の長になるため、たったそれだけの理由で殺され

るなんて。

「でも、本当は、グライも殺すつもりだったみたいだけどね。……まあ、死んだことにされてたけど。」

グライは、しばらく考え込んだ後、口を開く。

「でも、俺は、父さんに拾われた身だ。俺も、入っていたのか？」

グライのお父さんは、とっても優しいお人。拾った子どもとはいえ、本当の息子のように可愛がられていた。

「当然。ルサフの次がグライ。そういう風に、長は言っておられた。……二人とも継げなくなることは無いだろうと、お考えだったみたい」

だから、ルサフの旅の付き添いに、グライが選ばれたのに、知らなかったんだね。

また、しばらく考え込むグライ。この時に何か話すと、途端にグライは話が分からなくなる。だから、私も黙る。

「なるほどな。ビラニが継ぐのは、叔父さんが決めたのか？」

「いや、それが、情けない事なんだけど……。ニサルク様以外で決めた事なんだ。ニサルク様は、自分が長になるといって、聞かなかったから」

「そうなのか」

「次の話に行ってもいい？」

グライは不思議そうに頷く。そう。この話には、続きが有る。

「ニサルク様は、ビラ二様の代わりに取り仕切っているっていうのは、さっき言ったよね。それで、そのやっている事が酷いんだ」

ヒラサナは小さな村だけど、ニサルクは、その利用方法をよく知っていた。

「ヒラサナは占いが得意な人が多いじゃん。それで、砂漠の街や村を騙したり、脅迫したりしててね、従わせたり、お金もつけをしりしてるんだ」

グライが心底嫌そうな顔をしながら、考え込む。

「どうにか出来ないものなのか？」

「それが……」

自分の喉がこくりと鳴る。グライには、言いくいのだが……。

「ビラ二様を殺して長になるか、ニサルク様を殺して、暴走を止めるか。……それだけ」

ビラ二様は気の弱いお方だから、ニサルク様がいなくなれば、私達の言うことを聞くだろう。

「そ……そうか。」

沈黙が流れる。グライが悩むのを見ると、こっちまで苦しくなってくる。

「だから、ロロでここに来たのか」

ロロとは、私が乗って来たバドリーの事だ。

一番穏やかで、大きなバドリーだから、二人乗りも出来る。私人が乗るには大きいと思っていたのだろう。

「とりあえず……村に来てみる気は無い？」

「ああ。そうしたい。……でも、リンが……」

リンちゃんは、見たところ、砂漠の民では無さそうだし、ここで置いてきぼりはさすがに気が引ける、という事か。

「じゃあ、ここで待ってて貰おうよ。どっちにしろ、ヒラサナの問題には巻き込みたくないしね」

「ああ。そうしようか。じゃあ、話しとくよ」

グライは部屋を出る直前、ふるりと振り向いた。

「あと……兄さんの件は、本当にすまなかった。どんなに謝っても謝りきれないよ」

謝りたいのは、私の方だ。

旧友・三（前書き）

ちょっとラブって書いたんで、ちょっとだけ、ラブを入れようと頑張りました。

うーん、苦手だ。リンちゃん視点はわりかし好きなんですけど、難しいなあ……。

旧友・三

「なるほどね。でも、別に砂漠案内しなくてもいいのよ。他に客を探るか、逆に私が誰かを雇うっていうのも有りね」

ヒラサナの件が片付いたら、砂漠の向こうまで連れて行きたいんだそうだ。

自分の財産全てが奪われた可能性が有り、報酬を払う代わりに、砂漠を案内するんだと。

「いや、だから、それじゃ報酬の代わりが…それとも、急ぐのか？それなら……」

グライの話を遮る。

「だからあ、何回言ったら分かるの？今回は、バドリーに乗れなかった私の責任も有るし、なんか結局グライが私の用心棒みたいになっちゃったから報酬は無し」

言っておくが、私が怒りっぱいのではない。このことは、旅の中でも3回言っただし、さっきも言った。

いい加減にして欲しい気持ちも分かかって頂きたい。

「しかし、それじゃ……」

人が良すぎるのね。グライは。

「あんまりしつこいと、メリサさんに、嫌われるわよ」

だから、少しからかう。……だって、メリサさん可愛いし、幼なじみだし。いや、別に嫌みとかそうゆうのじゃ無いのよ。

「……分かった。……じゃあ、これはお願いだ。ここで待っていてくれ」

お願いって……そんなに報酬を誤魔化されるのが嫌か。

「ヒラサナに行つて、問題を片付けたら、旅をするつもりなんだ。だから、今度は俺がリンの用心棒をするから、待っていてくれ」

えつと……。彼は、また一緒に旅をしたいって言っているの？……まあ、そうだよな。新しくパーティーを組むより、慣れてる人とパーティー組む方が、断然楽だもんね。

だから、勘違いは駄目だよリン。

「うーん。こういう時は、用心棒じゃなくて、パーティーを組むって言った方が正しいけど。……そうね。じゃあ、戻ったら、パーティーを組みましょう。で、一緒に旅をしたら、楽しそうね」

グライは、ちょっと複雑そうな顔をした。

「いや、用心棒じゃないとだめなんだ。リンを……守りたいんだ」

真顔で言うな。天然か？天然なのか？なぜ、真顔で言えるんだ。

「報酬が釣り合うくらいには……」

ああ。そうね。そうだったわね。……まだその話してたの？というか、ずっとお金の事しか考えていなかったのね。

「OKOK。もう、なんでも良いわ。いいから、グライ、自分の部屋に戻らない？私もう疲れた。寝たい。」

「分かった。……なんか、怒っているのか？」

余計なことは聞かなくてよし。

「怒ってないから。早く出て行って」

急いで出ていくグライ。そういうところ、素直よねえ。

ああ。眠い。

ベッドに飛び込む。あまりふかふかしていないけれど、今の私なら直ぐ眠れる。

まったくもう。グライ。ちょっとときめいた、私の気持ち、返して！

警告（前書き）

今さらですが……

お気に入り登録や評価をして頂いた方々、ありがとうございます！

とても

励みになります！

この場をかりて

感謝を申し上げます。

警告

口口の背中を優しく撫でる。今はまだ朝も早い。早く起きすぎたのだ。

「口口。ヒラサナはどうだ？俺がいない間にだいぶ変わったんだってな」

キューと鳴きそうになる口口の口を慌てて押さえる。

「すまないすまない。静かにしなきゃだった」

ちよつと不機嫌になる口口。

「だから、ごめんって」

顔を擦り寄せてくる口口。許してくれるらしい。

「昨日さ、リンに言ったんだ。一緒に旅がしたいって。守りたいって」

顔が火照りそうになる。今考えれば、好きだと言っているようなものだ。

「それでさ。俺、結局最後までお金を理由にしてたんだ。本当小心者だよな」

財産とかの話も、ほぼ嘘だし。

じつと見詰める、ロロの長い首に、ぎゅっと抱きつく。

「俺はこのまま、リンと旅を続けたい。ビラニもニサルク叔父さんも、殺したくないんだ」

鋭い嘴で、軽くつつくロロ。……こいつは、昔から抱きつかれるのが嫌いだったつけ。

「お前。この薄情者」

離してやったが。こいつは、昔から俺の一番の友達だった。

バドリーが一番の友達だった俺の鳥笛は細かい。ある程度の会話なら出来る。

キューとまた鳴こうとする。

「分かった分かった。ちょっと外に出るか。ここじゃ騒いじや駄目だからな。……逃げるなよ」

紐を解き、その先の方を自分の手にくくりつける。少し歩いて、街を出ると、ロロがしきりに鳴く。

「なんだよ。……警告してるのか？」

今の鳴き方は、警告を示す鳴き方だった。

「わっ！何すんだ！」

なんと、ロロは器用に首を使い、背中に俺を乗せた。……結構、力がついたんだな。

「おいおい。まさか、飛ぶんじゃ……」

言うより早く、ロロは飛び立った。

しかもヒラサナとは、逆方向に。

止めなくては。……ロに手を当てる。

『戻れ。戻れ』

無視か。

『降りろ。降りろ』

やばい。どんどん離れていく。

「ああもう。お前が悪いんだぞ」

風の魔法を唱えて、空気の流れを変える。……端から見たら、鳥が後ろ向きに進んでいるという、不思議な光景だろうが、幸い誰もいない。

ロロは、キーキーと、甲高い声で鳴いている。止めて欲しいらしい。

あんまり嫌がるから、下に降ろした。

「ごめんな」

実は、ロロの行為が、自分を思いやっつての事だとは、分かっていた。

今度は、クアークアーと鳴き始めるロロ。心配、不安だと言いたいのか。嫌な事をされたっていうのに、優しい奴だ。

『大丈夫、大丈夫』

俺が、泣き言を言っていたから、ヒラサナから遠ざけてくれたのだ。大丈夫だということを伝えなければ、きっと戻ってくれる。

案の定、これ以上ロロは何も言わずに、街へ帰ってくれた。

……しかし、この時の俺は、ロロを少し侮り過ぎていたのかもしれない。

このロロの行為の真意に気づいていたら……と思ったのは、わずか一日後の事だった。

恋人

もうすぐ夜明け。やっとヒラサナが見えてきた。

振り向くと、グライの緊張した面持ちが見える。なんたつて、半年以上もこの村に帰っていなかったんだ。……それとも、醜い権力争いの事を考えているのか。

ゆつくりと口口が、村の手前で地に降りる。

「少し歩かなきゃだな」

口口を撫でながら、グライが言った。

「え、ええ。あ、あの……」

明らかに、私の言動はおかしくなっている。……実は、グライを村に入れたくないのだ。

でも、もう後戻りは出来ない事を考えると、今さら戻ろうなんて言えるはずがない。

「メリサ。落ち着いて。大丈夫だから」

何を勘違いしたのか、グライがゆつくり話し掛けてきた。あ、もうヒラサナに着いちゃう。

グライの喉がこくりと鳴る。一瞬だけ立ち止まって、村へ入って

行く。

その直後、前を歩いていたグライが揺れて、ばさりと前に倒れた。
……私の手には、鉄の棒。

「やあやあ。よくやってくれたね、メリサ」

大嫌いな声が前方から聞こえる。

「二……二サルク様……」

私、声が震えているの？私、涙が流れているの？

「や……くそくは……。ちゃんと守って下さいますよね……？」

「ああ。あの死に損ないを、助けてやるという、約束だったかな？
いいだろう。直ぐに楽にしてやろうではないか。あの世はきつと楽しいぞ」

「約束が違う！」

何も考えられなかった。とにかく、飛び掛かった。憎い憎いニサルクに。

私は、グライを騙したくなんか無かった。殴りたくなんか無かった。
……でも、でも！ルサフが、ルサフが死ぬなんて考えられない。

私の心の声がどこにも届かないままに、私は気を失った。

懐かしい、小さい時の事を思い出す。

私が8歳の時に、グライが拾われて来たんだっけ。

ルサフとグライと私。よく一緒に遊んでいたな。でも、グライはいつの間にかいなくなっちゃったりして、結局二人で遊んでいた。

ビラニはいつも勉強で可哀想だったな。

それから、私は9歳で村一番の占い師になった。

迷子になったグライを占いで探したこともあった。見つけた時は、何度も何度も、私の名前を呼んでくれて、嬉しかった。

「メリサ。メリサ」

あれ。グライの声が大人びている。

「わ！グライ？ここは？」

飛び起きて周囲を見渡す。ろうつく。ここは、牢獄だ。

「牢屋かな」

後頭部を撫でながら答えるグライ。私が殴った所だ。

「あ……あの……」

「メリサ、いいよ。何か事情があったんだろう？」

こくりと頷いてしまう。この人の優しさには、いつも甘えてしま

う。

支離滅裂な私の説明は、4回目で、グライに伝わった。

「えっと……つまり、兄さんは生きているが、死にかけているんだな。それでメリサが、俺をここに連れてくる替わりに、叔父さんが、兄さんを助けるという約束をしたって事か？」

その通り。私は黙って頷き、口を開いた。

「ごめんなさい」

「だから、いいって」

グライが慌てる。本当に優しいんだね。……しかし、責めてくれた方が、ずっと良いのだが。

許してもらえるような事じゃないんだよ。

「いいから寝よう。……明日朝一で、ここから脱走するんだから」

「……ど、どうやるの!？」

まさかの発言に驚く。

「これくらいなら、切れるから」

グライは鉄の格子を指差し、そして後方の大きな剣を指差した。

「なんで、牢屋に武器があるの？」

鉄の格子が切れる事も驚きだが、この事も気になったのだ。

うろたえて、なかなか答えないグライ。……やっと口を開いた。

「それが……恨むなら、メリサを殺せ。みたいな事を叔父さんが言っていて、中にこれを置いていったんだ」

「あ……そうなんだ」

だから、なんでグライが申し訳なさそうにするのかな。

「いや、でも良かったよ。これだったら、直ぐに脱走出来る」

そんな脱走脱走って、気軽に……あれ？

「そういえば。あの人に、この話聞かれていても、いいの？」

牢屋の見張りを指差しながら、コソコソ話し掛けた。

「ああ、良いんだ。聞かなかった事にしておいてくれるらしい」

すごい。グライって結構人望厚かったしね。

そんな人を落とし入れるなんて、私は最悪。

でも、いいの。ルサフさえ、生きていてくれれば……。

飛行（前書き）

遅くなつてすみません？

飛行

グライは、バドリーに乗ってヒラサナへと旅立った。

……さて、暇になった私。ぶらぶらと、市場でも行ってみましようかしら。でも、グライが必要最低限しか行くなって、言っていた気がするな。……気がするだけだろう。

市場には、バドリーを連れて歩いている、不思議な人がいた。50歳程のおっちゃんだ。

私はただ、ぼうつと見ていた。

「知りませんか？見ていませんか？」

おっちゃんは、果物屋の人に、必死に訴えかけている。どうやら、人探しをしているみたいだ。

それから、お店を変えて、尋ねる。

「背の高い男の人なんです。髪は、暗い金で、目は青くて……」

えーっと……。そんな人見た事あるなあ。

「ちょっといいかしら？……あなたが探している人って、名前はなんていうの？」

「グライ様です」

やっぱりか。おっちゃんも、メリサさんみたいに迎えに来たのだろっ。

「私、知っているわ。でも……」

「ほ、本当ですか！良かった良かった。それで、グライ様はどこに？」

人の話を遮るな。でも、それだけ焦っているのね。

「大丈夫よ。メリサさんがヒラサナまで連れて行ってくれたわ」

その人は、この世の終わりのような顔をした。……冗談じゃなくて。

「な、なに？どうしたの？大丈夫……あ」

倒れそうになったのを、私が支えるが、無理。このおっちゃん、重い。いや、どちらかといえば、おっちゃんに瘦せ型なのだが、私は意外と非力なのだ。

なにせ、私は物質だけで身体が出来ている訳ではない。魔族程では無いと思うが、力は弱い。

結局、親切な人が、私の部屋のベッドまで運んでくれた。

新しく部屋はとらない。だって、この人がお金を持っていないかったら、大変だからだ。

さっきの様子から考えて、二つの可能性がある。

一つは、おっちゃんがニサルクの使いだということ。

もう一つは、メリサさんがグライを騙したということ。

どうか一つ目であって欲しいと願うが……わかっている。こういう時、大概悪い方だ。

おっちゃんが目覚める。と同時に事情を尋ねた私に、丁寧に教えてくれた。

「ところで、お嬢さんは、なぜグライ様を知っているのですか？」

そういえば、言っていないかったな。ということは、おっちゃんは正体不明の女に、大変な秘密を教えたんだな。

おっちゃんは、私が話そうとするのを遮った。

「ああ。分かりました。言わなくて結構です」

なんか、確実に勘違いしているような気がするが、いいや。面倒くさい。

「ところで、私もヒラサナに乗せて行ってくれないかしら？」

「しかし……」

そりゃ渋るか。現在ヒラサナは、危険地帯だ。

「私一応、グライがヒラサナに着くまでの、用心棒だったのよね。無事に届ける義務があったの」

まあ、メリサさんに任せちゃったけど。……それどころか、用心棒として働けたかどうかさえ怪しい。

「そうですか……。よし！じゃあ、届けましょう。明日の朝でよろしいですか？」

いや……本当は、今直ぐにでも出発したいんだけど。

でも、そこはさすがに我慢した。おっちゃんもきついだろうしね。

夜になると、おっちゃんは部屋をとって、寝た。

私は、鏡に向かう。別に明日でもいいのだが、結構時間がかかる作業なので、今しておく。

『お前は、明日から二日間、空を飛んでも、空を飛んでいる事を認識出来なくなれ』

そう、命令の呪文。自分にかける場合は、時間をかけなければならない。

私の命令は、魔族にしか効かないのだ。

砂漠に入って直ぐの時にもこれが出来れば良かったのだが、鏡が無かったし、こんな化け物みたいな魔法、あんまり人には見せられない。

それに、認識出来なくなる といところが問題。端から見れば、ちよつと頭が、おかしくなつたみたいに見える。

まあ、だから、最終手段と言っても良い。

私にこれを使わせたんだから、無事でいなさいよ。グライ。

襲撃・一

それは、真夜中の事だった。

凄まじい音がして、後ろの壁が砕け散った。

「何をぼさつとしてるの？早く！行くわよ」

聞き慣れた声がある。

「あつ、メリサさんは、ここにいてね」

さっきよりも言葉は柔らかいのに、どこか刺々しい。

「危険だからな。大丈夫、リンが土でこの穴閉じたら、ここは安全だから」

自分の剣を取りながら、メリサを説得にかかる。……リンに睨まれている気がするが、なぜだろう。

外に出て、穴を塞いだ後に、こそこそとリンが話す。

「グライ、行つて。こっそりね。私が引き付けるから」

「引き付けるって……」

ニサルクは、相当警備を固めているという話を、メリサから聞いた。

「あー。いいから早く行け！」

「しかし……」

「じゃあ、約束する。終わったら、必ず旅をしましょう。……安心して。私、約束破った事無いから」

リンは、こんな状況なのにニコリと笑って、そして……唇が重なった。

「……絶対に約束破るなよ」

辛うじてそれだけ言って立ち去ったあと、後から派手な雷鳴が響いた。

それから走ることに、数分。ビラニとニサルクがいるであろう家に着いた。

リンのお陰で、人は一人もいなかった。

安心して、奥へ進む。多分、寝室にいるだろう。父さんが使っていた寝室か、兄さんが使っていた寝室か、どちらかにビラニかニサルクのどちらかがいるだろう。

突然だった。何かの気配がして振り向くと、振りかざされる斧が見えた。……咄嗟に退く……が、服が裂ける。

「くそっ」

思わず悪態をついてしまふ。警備をしていると見える人達が、5、6人いる。

正直無理かもしれないな……なんて考えている暇も無い。

一人から火の玉が飛んできたかと思うと、別の術師の風がそれを大きくする。……これは辛いな。

風と火は助け合うからだ。しかし、風なら、俺も持っている。

剣の平たい面を正面に向け……打った！跳ね返った火の玉は、更に巨大化して、相手は左右に避ける。

しかし、左右に避けたかどうかは、予想でしかない。なぜなら、さっきの斧君の怒涛の攻めに、かなり押されていたからだ。

一対一なら、もうすでに勝てていただろう。だが、火の玉を避けてから、相手は、電気と水で攻めて来た。……これも、助け合う関係だ。

しかし、あまり得意では無いのだろう。細々とした攻撃だったが、俺の気を紛らすには十分だった。

それから、もう二人、細身の剣と盾を持った男が、斧君に加勢をしてきた。計5人。……避けて受けて、また避けて……これの繰り返し。

さすがに、徐々にかすり傷も増えて来た。……電気による火傷も。

当然、呪文を唱える程の頭の余裕も無いし、打開策も考えられない

い。疲労も溜まって来た。……なんだか、絶対絶命？

しかし、不思議なもので、人には癖というものが有る。

この5人の攻撃パターンも、1分間もすれば掴めるものだ。

多少の傷を覚悟すれば、魔法も唱えられる。

それから、風を剣に乗せながら横に思い切り振るう。……大丈夫。
この頃の練習で、切れ味や威力を調節出来るようになった。

今放ったのは、切れ味ゼロの、威力全開。……つまり、吹っ飛ばすための攻撃。頭でも打って、気絶すれば良し。

しぶとい斧君には、拳骨を頭に与えた。

これで、残るはビラニとニサルクだけだろう。

そろりと、兄さんの寝室を開ける。覚悟を決めて中に入ると……
啞然とした。

そこには、変わり果てた兄さんがいたのだ。

顔は青白く、頬は痩け、息はしていても、死人のようだった。

……無意識だった。俺が回復の呪文を唱えていたのは。

「相変わらずだな」

ゆっくりと目を開いた兄さんは、か細くささやいた。……効いた！

「兄さん。兄さん？」

涙が次々と溢れてくる。嬉しくて。嬉しくて。

「俺は死ななかった……のか？」

泣きながらで、よく聞き取れなかったであろう俺の説明を、兄さんは、黙って聞いてくれた。

「そうか……。本当にすまなかったな。メリサは、しばらく牢に入れておかねばだな」

「そんな事したら、牢屋破壊するかも」

さっき言ったんだが、メリサの事は、もういいんだ。兄さんを助けたくてしたというのが、分からないのか。

「分かった分かった。グライが良いんなら、別にいいよ」

「良かった。じゃあ、早く終わらせてくるよ」

兄さんと和んでいる暇など無いんだった。

言うてから立とうとすると、背中に違和感を感じた。

「おっと。動かないでもらおうかな？」

襲撃・二

神鳴りを派手に噴き上げてから、わずか数分。

住人や衛兵やらが、わらわらと集まって来た。ざっと五十人。

村とはいっても、ラサメとは比にならないくらいの規模だな。

さて、そろそろ移動するかな。むこうが見失わないように気を使いながら、行き止まりに着く。

あらかじめ、後ろや横の壁は、高く強く、補強しておかなければ。

……前からのみ、しかも一度に数人が相手なら、勝機はある。なんとたつて時間が稼げればよいのだ。勝つのが目的ではない。

「さあ、来るなら来なさい！」

言った直後に、前の数人が立っている地面を、高く突き上げ、吹っ飛ばす。……ずるいの上等。

この魔法を延々と続ければ、前からは来れない。しかしそうすると、何とかして横や後ろから攻めて来ようとする奴らが出てくるだろう。……本末転倒！

仕方がないから、接近戦になる。もちろん、土の魔法しか使いません。なんとたつて、前回ぶつ倒れたからね。

……と強がってみたが、正直厳しいかもしれない。まあ、狭い路地だから、攻撃してくるのは一人だけだ。短い刀に、炎を乗せて攻撃してくる。わずか数十秒の間に、火傷数十箇所。切り傷は数箇所。約束、守れるかな。

守る一方だったのだが、変化が訪れる。

相手の後ろから振り下ろされる剣。刀からは炎が消え、相手は倒れた。

剣は震え、その人は怯えているようだった。

「ヒラサナの……人？」

震えながら、その人は頷いた。

よく見ると、遠くの方では、戦いが繰り広げられていた。みんなが、ヒラサナを守ろうとしているんだ。

「あなた様が、グライ様の味方だということは、分かっています。……そして、我々は、グライ様の味方です！」

その人は震えながら、強く言い切った。

戦いの中心、ちょっと開けた場所までなんとか行く。私のいた道には、もう数人しかいなかったからだ。

人数は同等だったが、当然衛兵が優勢だ。

私は、ちまちまと衛兵を吹っ飛ばしながら、襲いかかって来る衛兵を退けたり、住人を助けたりした。

「あなた、お強いですね。」

私を助けてくれた人だ。私よりも若そうな少女だ。

「そういうあなたこそ」

先程の怯えがどこかにいったかのような、俊敏な動きである。

「いえいえ、人を殺すのが初めてで……まだ震えが」

「ふふ。あなたグライみたいな人ね」

こんなところで、笑えるなんて。こんな戦場で。

「滅相もございません……あ……！」

気がつくと、少女の正面に、剣を振りかざす衛兵が。……魔法が伝わるのには間に合わない。

地面を思い切り蹴り、少女に抱きつくような格好になる。

背中に走る激痛に、身体がよじれる。その痛さに、自然と唸りが口から漏れるのが分かる。

息も出来ない。少女を離さなきゃいけないのに、それさえも出来ない。

「大丈夫ですか！？助けてください！誰か！誰か……」

少女の必死な声が、薄れゆく意識の中にこだまする。

せめて離れなきゃ。……最期の力を振り絞り、少女を突き飛ばす。

反動で転がる私の身体。蹴飛ばされる腕。もう、なんにも感じない。

ざまあみろ。こんなじゃ、アイツも出てこれなくなるだろう。私が死ねば、きっとアイツも死ぬ。

ただ……約束は、破っちゃう事になるのかなあ。

ごめんね。

グライ……。

襲撃・三

突きつけられているのは恐らく銃で、指一本で俺は死ぬ。

「やあやあ。おはよう、ルサフ殿。あなたには感謝しなくてはだな」

叔父さんの声だ。兄さんはじつと叔父さんを見つめるだけだ。

「グライ殿もお久しぶりで。しかし、牢を抜け出すのは、感心できませんなあ。兄上も、子どもにはしっかり躡をしておけばよいものを……おっと、失礼。グライ殿は本当の子ではなかったんでしたな」

「黙れ」

兄さんがキレた。起き上がろうとするが、ニサルクは、ぐっと銃口を押し付けた。

「いいんですかな？あなたの大事な大事な、賤しい弟君が死体になりますよ」

「黙れ！！」

耳をつんざく音が、部屋中に響いた。……肩に激痛が走り、手が自然とそこを押さえる。

「次は、心臓ですよ……おっと、魔法も駄目です。次あなたの方が何かを呟くと同時に、引き金を引きます」

無意識に回復魔法を唱えていた俺は、魔法を止め、兄さんも、呪文を唱えるのを止めた。

「しかし、愚かなものだ。知っていますか、グライ殿。あなたのガールフレンドは、死んだそうですよ。」

真っ白になる頭に、ニサルクの嫌らしい笑いが飛び込んでくる。

「嘘……だ」

「なんでも、住人共々、我が衛兵に逆らったそうで。……まあ、安心なさい。住人には、まだ生き残っているものもいるらしいですよ？」

「嘘だ……リンは約束を破るような奴じゃないから」

確信はあったし、今取り乱すと、俺どころか、兄さんまでも死んでしまう。

「すごいですなあ！相変わらずの冷静さに、感服しますよ、グライ殿。まあ、所詮彼女は、ただの旅の同行者ですものな。……それとも、冷静ではなくて、心がないのかな？グライ殿は。そういえば、昔からグライ殿は、怒りもせず、笑いもせず……」

試されている。取り乱すな。でも、頭が言うことを聞かない。心が許すなと叫ぶ。

「黙れ！！」

振り向いたと同時に、銃声が鳴り響く。びくりと震えた自分が情

けない。

そろそろと、自分の胸を見て、手を当てる。……何の異変もなければ、痛みも全くない。

と同時に、俺にもたれ掛かるニサルク。

「ビラニ……」

兄さんの言葉で顔を上げると、そこにはビラニがいた。手には煙の立つ銃。

「ぐ、ぐグライ様、お、おお父様は……」

一向に働こうとしない頭に、ムチをいれて、考える。

「ビラニが、やったのか……？」

「そうです」

震えが止まらないビラニ。あの、父親べったりのビラニが？

「ふう。よくやったよビラニ。いい子だ」

優しく話しかける兄さんは、もう、なんだか色々と納得したらしい。

「ありがとう。ビラニ」

そこら辺は、後で説明してもらうにして、とりあえず、言えるだ

けのことは言う。

と同時に泣き出すピラニ。泣きながら、なんとか話し出す。

「行つて、くだ、さい。グライ、様、を、待つ、ている、人、が……」

最後まで聞かなかった。もう、勝手に身体が動いていた。

家を出たとき、住人から歓声上がり、全ての人が自分に注目したが、気にしてなどいられない。

「リンはどこだ！」

遠くの方から順に、道が出来てくるのが見えた。人が左右に別れて出来た道だ。

不安と、微かな希望を持って歩む。

……約束を破ってたら、承知しないからな。

襲撃・三（後書き）

ニサルクさん

あっけなくてごめんなさい。

旅立・一

これは、夢？……ああ、あの世かしら。そういえば、死んだような気がする。はっきりとは思いつけないが。

死ぬと、真っ白になるのね。周りの世界が一面真っ白だから、最初、私は消えたのかと思っちゃった。

でも、なんだか意識はあるみたいだし、やっぱり消えはしてないわ。

なにもする気になれず、ぼんやり座っていると、遠くから、声が聞こえた。うん、確かに聞こえた。なんだか、この声を辿らなきゃいけない気がする。

重たい身体を起こして、声の方向に歩き出す。……まったく、あの世だったら、もう少し身体を軽くしてくれればいいのに。

「リン！リン！生きているはずなんだ！なあ、早く目を覚ませよ！」

声が大きくなる。近づいている証だ。聞いたことのある声だと思うのだが、うーん思い出せない。気のせいかしら。

しばらくして、ごつんと壁にぶつかる。何しろ白い壁だ。見えなくて当然。

その場につづくまる。痛いし、身体は重いし、もう動けない！

「ああ！効け、効け！何でうまくいかないんだ！……黙れ！生きて
いるんだ！」

確かにこの壁の向こうから、声が聞こえる。珍しく怒っているな。
……あれ？やっぱり私、この声聞いたことあるみたいだ。誰だっけ
かなあ。

「約束……約束をしたんだ……」

やくそく。……分かったわ。立てばいいんでしょう？歩けばいいん
でしょ？

目をつぶり、壁に手をつく。

「グライ……」

呟いた途端に、真っ白な世界が終わり、激しい痛みが戻ってくる。

「リン！良かった。良かった」

目の前には、真っ赤な顔のグライ。

「あら？泣いてるの？大袈裟ねえ」

そっとその涙を拭おうとすると、グライは、ぎゅっと抱きしめた。

「回復魔法が効かなくて、こんなこと初めてで、もう戻って来ない
かと」

おいおい。意外と苦しいぞ。

「それ……私のせいじゃないわよ。魔法を失敗しただけじゃない。まったく、魔法を失敗したことないって、どんな化け物よ。集中力がないときや、気持ちが悪れている時は……」

「分かってる。」

私の説明を遮るなんて！怒るわよ。……ああもう、それより、

「苦しい。離して」

うん。私けっこう、か弱いよ。分かってるのかな？

「わっごめん」

パツと離して赤くなるグライ。気まずい……。

「……あれ？傷が塞がってる」

ふと気がつくと、痛みがなくなっていたのだ。

「ああ、さっきかけた」

どんな早業だ。というより、出来るじゃん。……なんかもう……
疲れた。

「じゃあ、宿でもう寝るわ。なんか今日は疲れた」

グライの制止を無視して立ち上がる。

意識が薄くなる。

けれど、これはすぐに治るはずだ。永遠の別れじゃない。そう思うと、なんだか少し嬉しい気持ちになる。……アイツがほくそ笑んでいるのは分かっていたが。

旅立・二（前書き）

大変遅くなり

誠に申し訳ありません

旅立・二

日差しが幾分柔らかな朝方、ヒラサナの住人は、村の入り口付近に集まっていた。

見送りなんて、少し恥ずかしい。

「アットホームねえ」

リンがこっそり呟く。

「まあな……」

しかし、アットホームというよりは……

「はいはい。その君たち、冷やかしは止めましょう」

集まりの一番手前にいたメリサが、にこにこしながら後ろを向く。

多少、静かになったかな……。

「じゃあ、行つて来るよ」

後ろを向いてそそくさと出ていこうとすると、メリサが腕を掴んだ。

「待った待った。ふふふ。今日は去り行く君たちに、贈りものがありましてね……特別に！今すぐ占いをしてあげましょう！」

後ろがまた、はやしたてる。少し嫌そうにリンが笑う。

「リンちゃんとグライ、一気にいくよ！」

メリサが目をつぶり、手に持っていた水晶玉を胸に引き寄せる。すると、心なしか少し辺りが涼しくなった気になる。

「汝、闇の少女、闇の勢い衰えず、汝の身はたちまち闇に覆われん。忘るべからず、汝に秘めし意志の強さ」

メリサは大丈夫だろうか？占いが体力を消費することは知っている。

しかし、そのままの雰囲気のまま、メリサは続けた。

「汝、尽きぬ風、心地よき風を残し砂漠を発たん。汝、全てを払い、新しき光を導かん」

ふっと戻ってくるメリサ。

「じゃ、いつてらっしゃい」

非常にだるそうに言った。大丈夫か？

心配はしたが、リンが出ていこうとしていたので、村を出た。

「なんか、私の占い暗くないかしら」

しばらく歩いてから、リンが呟く。そういえば、闇とか言ってた

な。

「まあ、そうだな」

内容はよく分からなかったのだがな。

「グライの未来はなんか、いいよね」

……内容はよく分からなかったがな。

「そうか？でも、あくまで占いだから、あまり気にしないでいいと思うけどな。メリサも、都合の良いことだけを真に受けてればいいって言ってたし」

そりゃ、メリサも間違う時あるしな。

「そうなの？……でも、もし私が闇に覆われた時は、闇を払ってくれないかしら、尽きぬ風さん？」

口調は軽かったが、目だけは真剣だった。

しかしうーん、正直よく分からない。とりあえず、返事をしておう。

「ああ」

リンが不機嫌そうにする。

「適当に返事したでしょ」

お見通しだったか……。

「すまない。よく分からなくて」

占いやらなんやら、俺の頭の容量を越えた。

リンは大きくため息をついた。

「うかうかアイツに主導権は渡せないわね。まあ、もともとそんな気はないけど」

リンの口から出てくるアイツという言葉。前にも言っていたが、誰なんだろうな。

頭が混乱しそうだし、今は考えないようにしよう。

「まあ、とにかくゆっくり行こうか」

なんとなくだが、すぐにまた、忙しくなるような気がした。

エピローグ（前書き）

終わったー

エピローグ

少女は、遠ざかっていく少年をただただ、見つめていた。

「ビラニ。辛いだろう?」

少女は一度だけ頷く。

その頬は、かすかに濡れているようであった。

「報わないよなあ。もっと早くアプローチしておけば良かったんじゃないのか?」

ルサフは独り言を言うようだったが、ビラニはしっかりと答えた。

「いいえ。それはいけません。メリサ様は、グライ様を占ったんです。……砂漠の風は - グライ様の事ですね - 黒き娘の闇を払い、共に生きる……私は、黒き娘ではないんです。私は、か弱き小鳥でしたもの」

ルサフは、さっきの発言を取り消したい気持ちでいっぱいになったが、思ったよりもしっかりしているビラニに安心した。

「そうだったのか。……ところで、俺の占いはどうだったんだ?」

ルサフがこんな事を言ったのには、自分自身の占いの結果を知らなかったのも有るが、とにかく話を変えたかったのだ。

「隠れし泉。ただ一人の女に飲み尽くされん」

言いながらクスリと笑うビラニ。一方で呆然とするルサフ。

「メリサが言いたがらないはずだ。……恐ろしいな」

「メリサ様の事が好きなくせに」

ルサフは、しばらく目を泳がせていた。

「そういえば、出発の前にリンさんに会いましたよ。占いをして欲しいとおっしゃられたので、メリサ様のところまでお連れしました。」

ルサフは、なぜビラニがわざわざその話を出したのか不思議に思ったが、あまり触れないようにした。

「占いの結果はどうだったんだ？」

「汝新たな旅立ちの時とならん。旅立ちの朝には、砂漠の風が吹きたり」

いつもながらの記憶力に舌を巻くルサフだが、長時間喋ったことで、疲れが溜まっていた。

「まさにつて感じたな。……すまないが今日は疲れた。ほら、もうグライは見えなくなっただろう？早く部屋に戻りなさい」

言った後でルサフは、しまったと思ったが、ビラニはあまり気にしていない様子だ。

「さようなら。お大事に。言ってみたらすっきりしました」

少女はやっと、気持ちに整理がついたようだった。

エピソード（後書き）

エピソード、主人公不在……！

まあ

これが

サカナクアの限界です

勢いに任せた拙い文章、曖昧な構造、不定期更新……

足りない事だらけでしたが、それでも今まで読んできて下さった方々

本当にありがとうございました！

そして、これからもどうぞよろしく願っています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4919m/>

砂漠の風

2010年10月14日14時04分発行